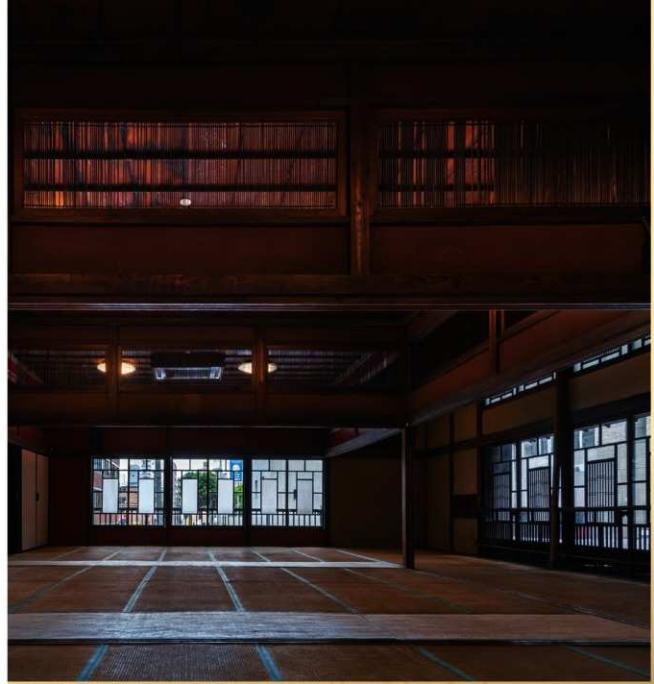


玉川旅館  
—歴史と記憶—



Tamagawa 1921 - 2020



## 発刊にあたって

船橋市は、昭和12年（1937）に市制を施行して以来、都心から近い地理的優位性、発達した鉄道網、充実した商業施設による高い生活の利便性や、貴重な干潟である三番瀬、北部地域を中心とした緑豊かな自然環境に恵まれ、賑わいのある都市として発展してきました。平成15年（2003）には県内初の中核市への移行を果たし、現在は人口64万人を超える全国でも有数の都市へと成長してまいりました。

大正・昭和・平成・令和と、約1世紀に渡り、船橋を代表する社交場・宿泊施設として、多くの人々を迎い入れ、船橋の変遷を見つめてきた「玉川旅館」が、令和2年（2020）4月30日で閉館いたしました。

多くの船橋市民の方に愛された「玉川旅館」を後世に伝えていくため、建造物の調査や写真撮影を行い、調査成果をまとめたものが、この報告書です。

多くの方々にご覧いただくとともに、昭和初期の大規模木造建造物群の記録として、末永く活用していただけることを願っております。

新型コロナウイルス感染症が拡大する中、閉館から取壊しまでの限られた期間で、調査にご協力いただきました関係者の皆様、調査にあたり格段のご配慮をいただきました玉川旅館の皆様に心から御礼申し上げます。

令和4年6月

船橋市教育委員会  
教育長 松本文化

## 例　　言

1. 本書は、国登録有形文化財 玉川旅館本館・第一別館・第二別館(千葉県船橋市湊町2丁目6番5号)の建物取壊し(解体工事)に先行して、船橋市教育委員会が実施した建造物の記録保存調査の報告書です。

2. 調査は、令和2年(2020)4月30日から5月30日まで実施しました。

3. 調査分担(敬称略・五十音順)

建造物調査:大橋智子、金出ミチル、十川百合子、渡邊義孝

建築写真撮影:小野吉彦

映像記録作成(ドローン空撮、動画撮影および編集、360度VR画像作成、写真撮影):株式会社萌翔社(委託)

建具・部材等調査:郷土資料館

美術品調査:文化課(文化振興係)

連絡調整、記録類等の調査ほか:文化課(歴史文化財係)・郷土資料館

<事務局(令和2年度)>

船橋市教育委員会

教育長　　松本文化

教育次長　小山泰生

生涯学習部　三澤史子(部長)

文化課:大屋武彦(課長)、白井太郎(課長補佐)、佐藤友美(課長補佐)

歴史文化財係:菅野泰久(係長)、大日向淳子(副主査)、玄蕃充子(主事)

文化振興係:山本雅美(副主査)、益子実華

郷土資料館:栗原薰子(館長)、白石　篤(館長補佐)、小田真裕(主任主事)

4. 登録抹消までの経緯は以下のとおりです。

平成20年(2008)4月18日

文化財登録原簿に登録(国登録有形文化財)

玉川旅館本館(第12-0101号)

玉川旅館第一別館(第12-0102号)

玉川旅館第二別館(第12-0103号)

令和2年(2020)4月30日

閉館

4月30日～5月30日

記録保存調査

5月11日

登録有形文化財の現状変更届出(建物取壊し)

6月15日～12月15日

解体工事

12月21日

登録有形文化財の現状変更完了報告

令和3年(2021)6月24日

登録抹消(官報告示)

5. 調査で作成した図面や映像等の記録類および寄贈を受けた部材や調度品等は、船橋市教育委員会が保管しています。

6. 記録保存に伴い収集し、寄贈を受けた資料は以下のとおりです。

①特徴のある部材等(屋根瓦・ネオン看板・床柱・襖・障子・欄間・結霜ガラス入建具・タイル・照明器具など)、②割烹旅館としての特徴を示す調度品(宴会や結婚式に使用された食器類など)、

③太宰治ゆかりの「桔梗」の間の調度品(文机・鉄製火鉢・鉄瓶・銀たばこ入れなど)、④記録資料(浴衣・パンフレット・写真・絵はがきなど)、⑤船橋市にゆかりのある作家の作品

7. 表紙および◎を付した写真は小野吉彦、※を付した写真は手塚博穂が撮影しました。

その他は、船橋市が著作権を有しています。

8. 掲載した古写真や玉川旅館パンフレットは、玉川旅館から提供を受けたものです。

9. 執筆分担および調査協力者は巻末に記しました。

10. 平面図の縮尺は、各図にスケールを示しました。断面図は任意の縮尺です。

11. 4K動画「玉川旅館物語」(ダイジェスト版・本編・資料編)と360度VR画像は、船橋市ホームページで公開しています。 <https://city.funabashi.lg.jp/gakushu/0005/p085872.html>

# 目 次

発刊にあたって

## 例 言

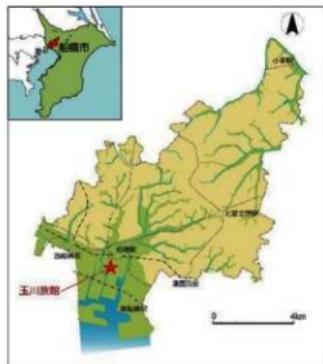
第一章 玉川旅館の沿革	
記録保存の経緯	4
玉川旅館の歴史 ~約1世紀の軌跡~	5
船橋海岸の風景 ~玉川旅館のすぐ近く~	10
第二章 玉川旅館の建築	
はじめ	14
本館	16
第一別館	22
癒しの時間の“おもてなし”~玉川旅館の温泉~	31
第二別館	32
桔梗の間	46
太宰治と船橋・玉川 ~文豪の残した足跡巡り~	49
「玉川旅館」創業時の建物 ~旧本館~	50
第二別館の盛土と松杭	53
第三章 玉川の日常	
玉川旅館の“いま”と“むかし”	54
玉川旅館 小川家 家系図	61
年表 ~玉川旅館の記憶~	62
調査協力・執筆・編集・撮影・図面作成・奥付	

## 【参考文献】

- 日本都市協会動態図鑑観光会編(1955)『船橋市動態図鑑』社団法人日本都市協会
- 船橋市教育委員会社会教育課編(1991)『船橋市民家分布調査報告 第8次一本町・湊町地区-』船橋市教育委員会
- 船橋市史編さん委員会編(1997)「大正六年暴風海嘯惨害誌」「船橋市史 史料編九」, pp.217-312, 船橋市
- 太宰治(1998)『太宰治全集 9』筑摩書房
- 大木勲(2001)『太宰治縁りの宿 料亭「玉川」の略史』株式会社玉川
- 千葉県教育委員会編(2004)『千葉県の近代和風建築』
- 長谷川芳夫(2011)「昭和10年代からの三田浜・都疋浜地域環境の変化と思い出話」「史談会だより6」, pp.8-15, 船橋市史談会

# 第一章 玉川旅館の沿革

## 記録保存の経緯



玉川旅館の位置



取壊しを行う前に、玉川旅館を後世に  
伝えるために撮影をしました



様々な分野の専門家が集結して、  
調査を行いました

玉川旅館は、国の登録有形文化財の割烹旅館で、多くの方々に船橋市のランドマークとして親しまれてきました。

令和2年（2020）4月に、同月末日をもって閉館し、建物を取壊すことになったと、船橋市教育委員会 生涯学習部文化課に連絡がありました。

コロナ禍で宴会や宿泊者が減り、屋根瓦等の修繕や暖房費等に大きな費用が掛かるなど、建物の維持管理が難しくなり、後継者もいないことから、創業100年を機に廃業を決めたとのことでした。

市では、4月中旬に建造物の保存の可能性について、玉川旅館を運営する株式会社玉川と話し合いを持ちました。すでに取壊しのスケジュールが決まっており、保存はできませんでしたが、取壊しの前に記録保存のための調査を行うことについての了解と協力が得られ、申し出により、調度品等を市に寄贈いただけることになりました。

調査は、以下の項目について、令和2年（2020）4月30日から5月30日まで実施しました。

①専門家による建造物調査と図面作成、②建築写真家による建物内外の撮影、③建物・部屋内・調度品等の撮影、④ドローンによる空撮、⑤4Kシネマカメラでの動画撮影、⑥360度VR画像の作成、⑦調度品や部材等の調査と保存、⑧写真やはがき等、関連資料の調査と寄贈受け入れ、⑨関係者への聞き取り調査

取壊しがはじまった6月以降も、関係者や解体事業者の情報提供を受けて、隨時、建物構造や基礎などの状況を確認し、写真撮影を行いました。

なお、編集した動画と360度VR画像は船橋市ホームページで公開しています。本書とあわせてご覧ください。



動画・360度VR画像の公開ページ

# 玉川旅館の歴史～約1世紀の軌跡～

江戸から成田参詣や房総へ向かう人々の宿場町として栄えた船橋には多くの旅館が並び、江戸時代末の天保2年（1831）には、現在の本町通り沿いに29軒を数えました。

明治27年（1894）には総武鉄道（現：JR）が本所（現：錦糸町）から佐倉まで開通して船橋駅が開業すると、東京との時間的距離が縮まりました。大正5年（1916）には京成電気軌道（現：京成電鉄）が開通して、さらに利便性が向上したことにより、東京近郊の観光地・保養地としての人気が高まります。また、京成電気軌道は電力発電を行い、電力を沿線の住宅に供給を行うことで、船橋でも一般家庭にも電灯が点てる家が出始めました。

一方、船橋の沿岸部には海老川の河口付近や濁筋以外の多くの場所に塩田が広がっていました。行徳周辺の東京湾の奥部では古くから塩の生産が行われており、江戸時代には、行徳から西海神村（現在の海神6丁目周辺）の沿岸で塩田が開かれました。明治時代になると、塩田はさらに東側に広がり、海神村・九日市村・五日市村（後の船橋町）の沿岸にも塩田が造られるようになります。

そのうちの一つに、三田浜塩田がありました。三田浜塩田は子爵仁礼景範によって、現在の船橋市湊町2・3丁目に付近に開かれ、仁礼が三田（東京都港区）に住居を構えていたことから「三田浜塩田」と呼ばれました。三田浜塩田2代目の経営者は玉川旅館の創業者の父、小川欽蔵です。小川欽蔵は明治41年（1908）に亡くなります。

大正6年（1917）9月30日から10月1日にかけて台風が襲来し、暴風雨と高潮によって船橋周辺は甚大な被害を受けます。旧船橋町では死者・行方不明者62人、流失家屋104戸、全壊家屋44戸等の被害をこうむり、塩田も甚大な被害を受け、その多くの復旧がままならない状態だったようです。



大正10年（1921）頃の玉川旅館周辺  
大正10年修正 大正14年（1925）発行  
2万5千分の1「船橋」地形図



平成27年（2015）頃の玉川旅館周辺  
平成27年12月撮影の写真から図化



船橋大神宮の奉納相撲の様子  
平成26年(2014)

名前です。

昭和2年(1927)9月、松井天山によって描かれた「千葉県船橋町鳥瞰図」には、塩田の北側、道路を挟んで池があり、その北側の一段高くなつた土地に玉川旅館が建てられているのが確認できます。図には「割烹旅館 玉川」、裏面に掲載されている広告には「海水浴ラヂューム温泉 御旅館 御料理 玉川」と記されています。昭和2年には温泉に入る旅館業を営んでいました。



「千葉県船橋町鳥瞰図」

松井天山

昭和2年(1927)9月

○で囲んだ場所が玉川旅館。  
手前の「塩採取場」は三田浜塩田です

清 鮸味賞 松本商店	田 沼 胡粉製造所
海水浴ラヂューム温泉	東京衛生試験所證明行
御旅館	眞ニ寒風的
ラヂューム	玉川
海水浴場	船興園

鳥瞰図の裏の広告(抜粋)「玉川」の記載もあり、海水浴ができ、ラヂューム温泉がある旅館として、営業していたことがわかります



昭和初期の絵葉書からは、当時の玉川旅館の様子を知ることができる

「千葉県船橋町鳥瞰図」より後の発行と考えられる絵葉書からも当時の玉川旅館の様子がわかります。絵葉書には第一別館と第二別館は写っていますが、本館が写っていないことから、撮影年は、昭和8年（1933）の第二別館建築から昭和16年（1941）と伝えられる本館建築までの間であることがわかります。昭和10年（1935）7月～11年（1936）10月に船橋で暮らしていた太宰治は、第二別館の「桔梗」の間に20日間宿泊したと伝えられています。太宰が見た玉川旅館は、この絵葉書のような風景だったのでしょう。



「船橋市動植物図鑑」昭和30年(1955)

本館建築後、昭和30年(1955)発行の「船橋市動態図鑑」によると、塩田があった場所は空き地や住宅地となり、さらにその南側の海岸は海水浴場でした。玉川旅館の宿泊者も海水浴を楽しんでいたと思われます。国道沿いに田んぼが広がっていて玉川の周囲に大きな建物はなく、国道14号線からも玉川旅館がよく見えました。当時は遠くからも目立つ大きな建物であったことがわかります。

昭和51年(1976)10月13日には火災が発生し、旧本館(約70坪)と隣合わせた調理場が焼けました。この火災により、旅館の古い記録類等や、太宰治が宿泊費の代わりに置いていったと伝えられた万年筆・フランス語の辞書も焼けてしまい、現存していません。また、平成23年(2011)の東日本大震災では、第一別館や第二別館の棟瓦がずれるくらいで、大きな被害はありませんでした。

大正10年(1921)の

創業から、多くの人に親しまれてきた玉川旅館は、船橋市のランドマーク的存在となり、平成20年(2008)4月18日には玉川旅館の3棟(本館・第一別館・第二別館)が、市内では2番目の国登録有形文化財となりました。

長い歴史と昭和の風情を残す大型の木造建造物として、船橋を象徴する建造物でもあった玉川旅館でしたが、建物の維持管理費の増大や経営を取り巻く環境の変化等から令和2年(2020)4月30日で閉鎖し、創業約100年の歴史に幕を閉じました。建物の市有化による玉川旅館の保存も検討しましたが難しく、同年6月から取壊しに向けた準備が進められ、12月には解体が終了しました。



国道14号線からは、玉川旅館を看板とともに確認できる  
昭和33年(1958) ※



旧船橋市役所から見た玉川旅館第二別館。  
奥には行田の無線塔が見える  
昭和39年(1964) ※



「旧本館」の火災の様子  
昭和51年(1976)

今は失われてしましましたが、玉川旅館は大正・昭和・平成・令和と船橋の近現代を知るうえで今もなお欠かせない存在なのです。



北側上空から見た、解体前の玉川旅館。  
令和2年(2020)閉館前まで多くの客で賑わった。◎



## 船橋海岸の風景～玉川旅館のすぐ近く～



『PARADISE FUNABASHI』 昭和26年(1951) 船橋市西図書館所蔵



『PARADISE FUNABASHI』  
(三田浜楽園・玉川部分拡大)

上の写真は、昭和26年（1951）に発行されたリーフレット『PARADISE FUNABASHI』（発行：船橋市役所・船橋市観光協会）の一部です。左に拡大して示したように、「三田浜楽園」と「玉川」が描かれています。『PARADISE FUNABASHI』の中の海沿いを三田浜楽園から左（東）に進むと、「海楽園」「オートレース場」「船橋競馬場」も見えます。文章が書かれた裏面には、船橋市の名勝の一つ「袖ヶ浦海濱」における「海釣」「汐干狩」「海水浴」「船橋オートレース場・船橋競馬場」の記載があります。そして、「温泉と観光旅館」について、次のように紹介されています。

海浜の優と温泉の秀とを兼ねた粹な割烹旅館が市内各所に点在、何れも高雅な設備と優秀新鮮な料理を取り揃えサービスの満点を期して一般雄士の利便に応じて居ます。

まだ二宮町と豊富村の範囲が含まれていなかった当時の船橋市域において、湾岸部はとても見どころが多いエリアだったのです。次に、大正中期から昭和初期（1916～1930）頃に発行されたと考えられる、数枚組の写真絵葉書「船橋名所」の一枚を紹介します。名所の一つとして選ばれた「船橋塩田」は、三田浜塩田であると考えられています。発行された時期に約30～40年の違いがありますが、塩田の写真絵葉書と『PARADISE FUNABASHI』から感じられる船橋海岸的印象は、かなり違います。玉川旅館と三田浜楽園が相次いで開業した大正末から昭和の初めの頃に船橋海岸の風景は、大きく変化したのです。



絵葉書 船橋塩田 大正時代頃

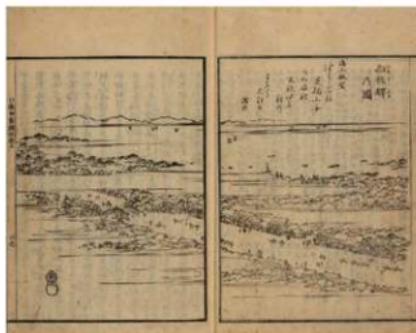
船橋市郷土資料館所蔵

### 風色又類ひなし—江戸時代—

船橋海岸の眺望の良さは、江戸時代から評判だったようです。文化11年（1814）に、友人と成田山参詣をした際に船橋で一泊した江戸の隠居僧十方庵敬順は、著書『遊歴雑記』に、船橋の街並みと大神宮からの眺望を記しています。

- ・同廻舟橋の駅は、頗る都会の地にして、東西の町長さ武拾余町、南北の通凡七八町もやあらん、太神宮の前より南は、上総・安房等への街道、北は下総・常陸・野州等への往還なれば、其繁盛に、家居軒をつらね、茶店・酒樓・商家・食店・旅籠屋、必至と建つどみ、万づ用弁する事、此駅にありて、太神宮下殊に賑はし
- ・西の方は駅亭の家並、やわたの茂林をながめ、南は行徳の海上より房総の海づらを一円に眺望して、風色又類ひなし

右に示した船橋宿の画像は、嘉永7年（1854）に出版された『成田参詣記』のものです。これらの資料からは、江戸時代の船橋について、各地と江戸を結ぶ立地と、路程からの眺望の良さが認識されていた様子を窺えます。そうした認識は、江戸時代後期から幕末期頃に成田山参詣等の旅が盛んになるにつれて、広まっていったと考えられます。



「成田参詣記」卷三 「船橋駅之図」  
嘉永7年(1854) 船橋市西図書館所蔵

船橋海岸には、明治10年代～20年代に、塩田地帯が形成されていきます。そして、明治27年（1894）7月の総武鉄道市川・佐倉間開通および船橋駅開業に続き、同年12月に本所・市川間が開通すると、船橋海岸に鉄道利用者が訪れるようになります。鉄道の車窓から船橋の風景を見た人もいたでしょう。こうした、鉄道開通後に船橋海岸を見た人々は、江戸時代とは異なる、先に紹介した写真絵葉書のような塩田がある風景を見たはずです。

### 海浜一帯其設備ニ勤メツヽアリ一大正末～昭和初期—



椿貞雄《船橋観光協会ポスター》  
昭和13年（1938）頃 船橋市所蔵

この報告書の6ページで紹介した松井天山てんざん『千葉県船橋町鳥瞰図』（昭和2年（1927））には、大正15年（1926）発行の『船橋町勢要覧』を抜粋したという、「千葉県船橋町梗概」という文章が載っています。そこからは、玉川旅館の創業から間もない大正末から昭和初めの頃の、船橋海岸の様子を窺えます。

本町ハ海岸一帯砂浜ニシテ遠浅ナレバ貝類ノ養殖盛ニ行ハレ又汐干狩海水浴場トシテ海浜一帯其設備ニ勤メツヽアリ

当時は、まだ三田浜楽園はありません。  
「勤メツヽアリ」という表現は、当時の状況をよく表しているといえるでしょう。

松井天山の鳥瞰図から10年余り経った昭和10年代、船橋海岸は、潮干狩りや海水浴に訪れる観光客を受け入れる設備が整ってきたようです。船橋町に住んでいた画家椿貞雄（1896-1957）が、昭和13年（1938）頃に描いた船橋観光協会のポスターでは、「東京から一番近い」海水浴場というアクセスの良さと、「大プール」という設備のことが書かれています。

### 春は干潟で潮干狩、夏は海水浴—昭和20年代後半以降—

昭和12年（1937）に市制施行した船橋市には、昭和28年（1953）の二宮町に続き、昭和29年（1954）4月1日に、豊富村が編入されました。この豊富村編入と同日の昭和29年4月1日付けで、船橋市役所商工課観光協会事務局により、「観光の船橋」という冊子が発行されています。この冊子には、冒頭で見開き1ページを割き「船橋の海」の写真が載り、「楽園情緒 庭園と岩風呂」として、三田浜楽園の写真も載っています。次に、「観光の船橋」の中から、次ページ上の写真が掲載された「明けゆく船橋」という部分の文章を引用します。



左：「はぜつりのにぎわい」 右：海水浴『観光の船橋』 昭和29年(1954) 船橋市郷土資料館所蔵

春は干潟で潮干狩、三咲の桜狩りを楽しみ、夏は海水浴に、秋は富士山を静波遙かに仰ぎつつ海釣りの大漁に喜び、冬に雪見にラジウム温泉に浴す外四季を通じてオートレースに競馬に、大勢の観光客を呼んでいます。

下線を付した内容は、いずれも船橋海岸や玉川旅館と関係します。昭和29年（1954）当時の船橋海岸は、市内の代表的な観光地であり、しかも、四季それぞれの楽しみを得られたのです。

次に、『観光の船橋』の10年後の昭和39年（1964）に発行された、『観光と産業』の中から、「船橋市の観光概要」という部分を引用します。

波静かな東京湾の袖ヶ浦に面した船橋市は、千葉県の西北部に位置し、遠く富士の秀峰を仰ぎ汐干狩・海水浴の好適地として知られておりましたが、近年海の温泉娛樂の殿堂であるヘルスセンターの拡充・進展により一躍全国に名聲を博するに及ぼしました。これに加えて東洋一の規模と称せられる国営中山競馬場を始め、名所・旧跡も数多く、海釣りにも絶好の地として有名であります。

『観光と産業』には、船橋海岸で楽しめる、潮干狩・ハゼ釣り・海水浴・花火大会の写真が掲載されています。また、『観光と産業』とほぼ同時期に発行された観光客向けの旅館の案内には、玉川旅館の広告も掲載されています。玉川旅館に宿泊し、これらのレジャーを楽しんだ人は多かったと考えられます。

玉川旅館は、大正・昭和・平成・令和にかけて、同じ場所で営業を続けてきました。その一方で、玉川旅館を含む船橋海岸の風景は、大正から令和まで約100年の間に、大きく変化しました。



『観光と産業』  
昭和39年(1964) 船橋市郷土資料館所蔵



## 第二章 玉川旅館の建築

### はじめに

船橋の製塩業は、明治時代末から大正時代にかけて重なった台風による高潮被害をきっかけとして昭和初期に廃止され、塩田跡地の海辺には数々の行楽地が造られるようになりました。中でも市街地に近い位置にある玉川旅館は一足先となる明治時代の終わりにこの場所で営業を始め、各時代の流行や世相の変化に応じるように当時最先端の意匠と建築技術を用いた各建物が建設されました。いずれも昭和戦前期に完成された個性的な3棟が今日に伝えられています。

楼閣のような本館・外観が屋形船を思わせる第一別館・大広間を誇る第二別館が、旅館を訪れる人々を魅了したことでしょう。海のある南側に大きく窓を開き、周囲に生い茂る樹木によって外からの目も遮られる場所では、日常から離れたひとときを過ごすことができます。

昭和16年（1941）築と伝わる本館は崖地に立ち、海側を3階建、北側を2階建として、極太の丸太柱が3層を貫きます。ガラス建具をふんだんに用いた楼上から得られる海の眺望を前に、こちらなりした部屋では落ち着いて休むことができたことでしょう。

昭和3年（1928）に完成し、まるで船のように南側の胴を張り出した第一別館では、宴会と入浴の両方を楽しむことができます。4部屋を続き間としても利用できる各室は、使われた鋸木の異なる床の間造作と欄間のガラス建具に施された風景と文様が目を惹きます。第二次世界大戦が終わって間もなく建て替えられたモダンな浴室は、多くの方々に安らぎの時間をもたらしました。その後、旅館内に複数棟建てられることとなった浴室棟の先駆けです。

昭和8年（1933）に建てられた、玉川旅館の最も大きい建物である第二別館には、様々な要素がぎゅっと詰め込まれています。堂々とした正面玄関に入った奥にある広間は、襖を開け放すと大きな宴会場になります。このような「百疊敷」は、当時の旅館の目玉となるものでした。高く立ち上げた鉄筋コンクリート造の基礎を兼ねる厚い壁に守られた下階には、各部屋が迷宮のように配置されています。ここには、ビリヤード場と親密な客室が備えられています。

明治時代以降、船橋を含む近隣の市には数多くの陸軍施設が置かれ、玉川旅館も軍人たちに遊興の場を提供したと思われます。日中戦争が始まり、昭和13年（1938）には国家総動員法が制定されました。民間での建築行為が制限されるようになってからの時期に本館が竣工したことには、国の支援がうかがえます。戦後になると、入浴と会食を楽しめる旅館として賑わい、地元の方々に親しまれました。広間は結婚式披露宴の会場ともなり、多くの人々の思い出に残る場所となりました。

明治時代末に玉川旅館がこの土地の開発を手がけてから約1世紀にわたる船橋の近代化の歴史を写しつつ、かたちにしてきたのがこれらの建物です。接客の形式が時代と共に変わるためにつれて、間取の変更や設備の更新など、少しずつ改装されてきてはいますが、堂々とした建物の本質は変わることなく、世代を超えて親しまれ、使い続けられてきました。長年にわたり磨かれてきた誇り高い輝きが、それぞれの建物の隅々から感じられます。

## 玉川旅館配置図





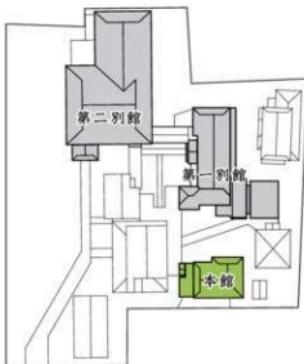
玉川旅館に楼閣のようにそびえる本館、北と南で欄干のデザインが異なっている ◎

## 本館

**背景** 昭和16年（1941）頃の建築と伝わっています。棟札がないため正確な施工者などはわかりませんが、以下の資料にもこの年が見られます。玉川旅館が保管している平成11年（1999）3月付、ひのきによる檜風呂増築時の「公衆浴場許可申請書」添付の図中に「昭和16年6月30日新築」と日付まで記載されていること。また先代女将から聞き取りしたと思われる『千葉県の近代和風建築』平成16年（2004）にも、昭和16年と記載されていることによります。

この頃小川家の家族にも大きな変化がありました。昭和12年（1937）に家長の與市が死去したため、まだ20代の長男實（よしのぶ）が家督を継ぎましたが、3年後の昭和15年（1940）に病死。その前月に正子と結婚した次男の藏（くらむか）が翌年家督を継ぎました。本館はその頃建築したことになります。新しい体制での玉川旅館繁栄の願いを込めて、本館建築には旅館経営に采配を振るっていた女将のはなが関わったと思われます。

日本は太平洋戦争に入った年で、それ以前の日中戦争のため、一般的の建築は昭和13年（1938）以降「資材



統制」で建築はできなくなっていました。玉川旅館が民間でありながら建築資材を揃えることができたのは、軍人による利用などの関係があったためと思われます。

本館の位置は敷地の西南にあたります。現在は北東角が玄関になっていますが、新築時には独立した玄関は設けず、現在帳場になっている建物の前身建物「旧本館」南縁側から現在の玄関に入っていました。昭和51

年（1976）に「旧本館」が火災にあった時、本館も一部焼いたため、帳場建物から独立させて、玄関を設けました。

**特徴** 建物は木造2階建入母屋造和瓦葺きで、大屋根は南北棟に直行して一部東に張り出した部分は東を正面にした入母屋造になっています。北側は一部平屋で屋根は片流れの下屋になっています。窓台欄干の上に出し桁で支える庇を設け、垂木を一本おきに吹き寄せています。1階2階とこの造作を繰り返すことで、建物にリズムが生まれています。欄干の手摺デザインも装飾的で、この建物の特徴となっています。南側の敷地が下がっている部分では高床式としているため、一部3階建てとなっています。高床部分の南面柱は、地上部分で直径30cmほどの丸太自然木からなる柱3本は上階になると徐々に細くなり、2階まで通し柱としています。軍事統制下にこれだけの材料を調達できたことは玉川旅館の隆盛の証となります。現在は耐震補強のため、地下部分で丸太の添え柱と筋違が入っています。



東から見た本館全景 ◎



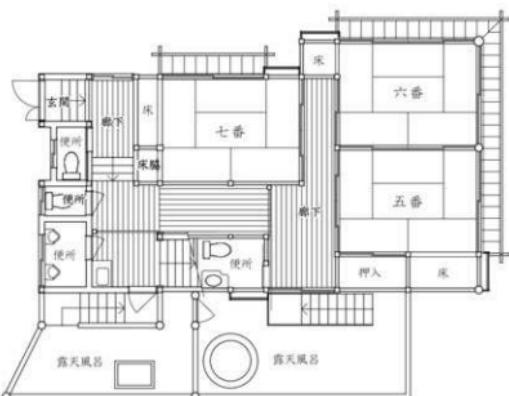
本館の窓台欄干と庇 ◎



本館の通し柱3本と補強の添え柱、筋違、こげ茶色の柱が通し柱



2階



1階



0 5m

玉川旅館 本館平面図



本館 1階 「五番」 西面床を見る ◎



本館 1階 「五番」より「六番」 東南方向 ◎

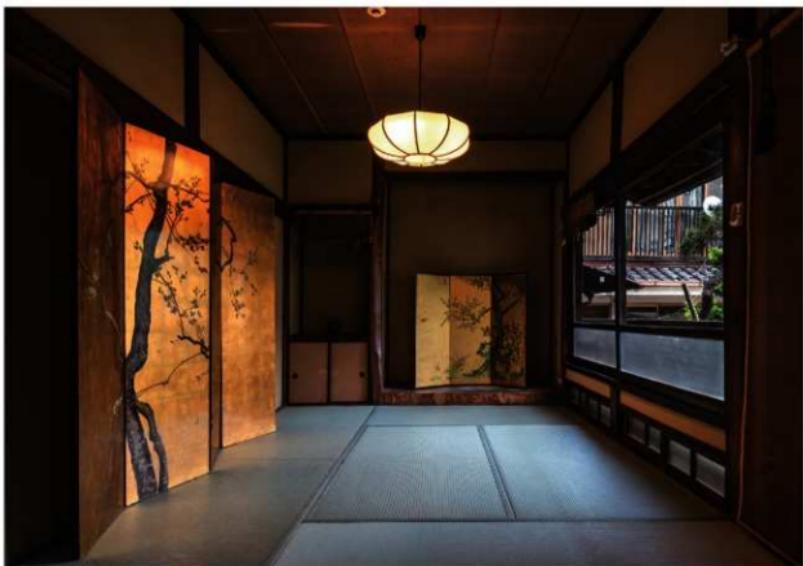
本館西側にはふたつの露天風呂が増築されています。1階階段下の便所も改修されたものです。

1階平面は、玄関を入ると東に折れ更に南に折れた突き当りに「五番」「六番」と呼ばれる六畳間が二間続きで東西に並んでいます。その東と南のガラス戸には奥行2尺（約60cm）の欄干付窓台が回っています。窓台の下には掃き出しの小窓があり、窓台に腰かけると足元に涼しい風を取り込む工夫がなされています。西側の「五番」には間口一間の床の間と押入があり、東側の「六番」には北側の廊下に張り出す形で間口半間の小さな床の間があります。ここまで幅三間半奥行二間半の部分が1階2階共北側より3尺（約90cm）東に張り出しています。南面ガラス窓の通り、「六番」の隅柱と二間の境に前述の丸太通し柱が見えています。もう一本の丸太柱は床の間の隅に半分隠されています。この二部屋の北側廊下を挟んで「七番」と呼ばれる六畳間があります。奥行の浅い床の間と床脇があり、東側に欄干付窓台がついています。掃き出しの小窓も南の二部屋と同様のしつらえとなっていますが、前述の火災時に類焼したため、窓周りを新材で造り替えています。この三部屋共長押付き、天井は敷目板貼で壁は祭染塗です。「五番」だけ壁は白漆喰に塗り替えています。北側「七番」の西側廊下と並んで、階段があります。廊下も階段も幅は4尺5寸（約1m35cm）と広くなっています。



本館 1階 「六番」の隅の丸太通し柱と窓台 ◎

本館 1階 「六番」 東面  
窓外に第一別館を見る ◎



本館 1階 「七番」 北面床と床脇 ◎



本館 2階 「一番」 西面床 ◎

2階に上がると1階の南側二間と同じ位置に「一番」「二番」と呼ばれる六畳が二間続きに並んでいます。西側の「一番」は間口一間の床の間に違い棚のある床脇が付いた、本館で最も格式が高い部屋となっています。東の「二番」は1階の「六番」同様に間口半間の床の間がありましたが、便所に改造されています。



本館 2階 「一番」、床脇の違い棚 ◎



本館 2階 「一番」から「二番」 東面方向 ◎



本館 2階 「一番」から「二番」 南方向 ◎



本館 2階 「三番」 西面床 ◎

窓周りのしつらえなどは1階とほぼ同様で、隅柱、間仕切境の丸太通し柱が見えています。東と南には1階と同じデザインの窓台と欄干が回り、見晴らしの良い部屋となっています。

北側の廊下を挟んだ八畳間は「三番」と呼ばれ、1尺5寸（約45cm）と浅い奥行の床の間と押入が設けられています。東の窓台、欄干、地窓なども1階と同様のしつらえで、壁天井の仕上げは1階と同様です。窓周りは1階と同じ時期に火災の類焼で新しく造り替えていました。東面北寄りの欄干デザインが南の欄干と比べ簡素なデザインとなっています。また1階と2階の手摺形状も異なっています。所有者からの聞き取りで2階まで類焼したと聞いていますが、火災前の写真でも既に簡素なデザインになっているため、どの時点での改修か特定できませんでした。

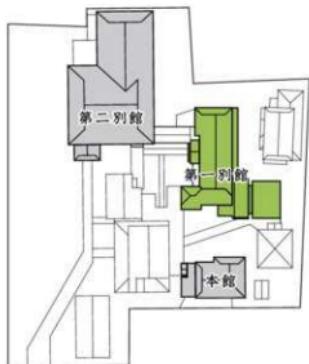


第一別館の外観 玄関へのアプローチ 中庭は植栽されていて風情がある ◎

## 第一別館

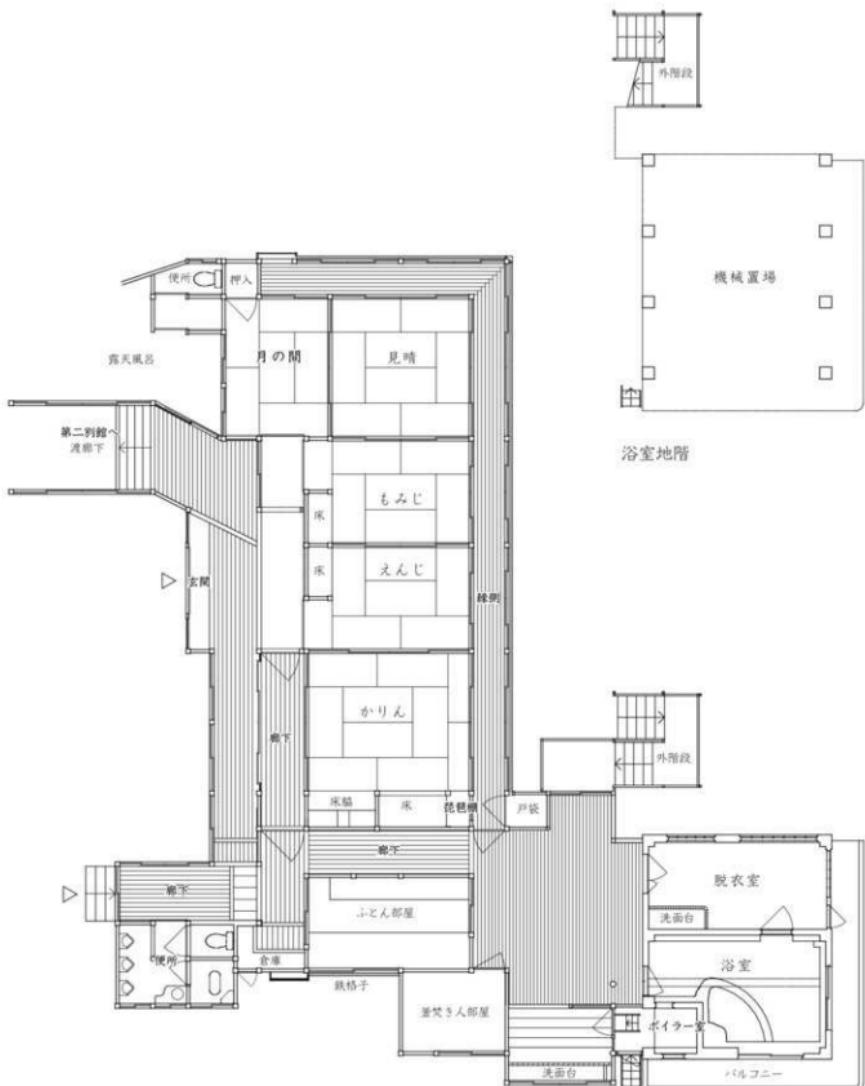
第一別館は調査時に現存していた建物の中で最も早く建った建物で、敷地のほぼ中央南端に位置しています。大正時代に建築されたと長く所有者には伝わっていましたが、平成20年（2008）の国登録有形文化財手続き資料作成のための小屋裏調査で棟札が発見され、昭和3年（1928）の建物だということが判りました。本調査でも、玉川旅館創業者の小川與市が施主として書かれた、「昭和三年三月一日

上棟」の銘のある棟札を上様式の祝いに立てた幣串と共に、確認しています。建築の棟上げの時に製作される棟札には、



第一別館棟札下し書き  
小屋裏調査で発見された棟札  
高さ 313mm 眉幅 106mm 厚さ 16mm





第一別館 1階 平面図



0 5m

玉川旅館 第一別館・浴室



第一別館 東面 ◎

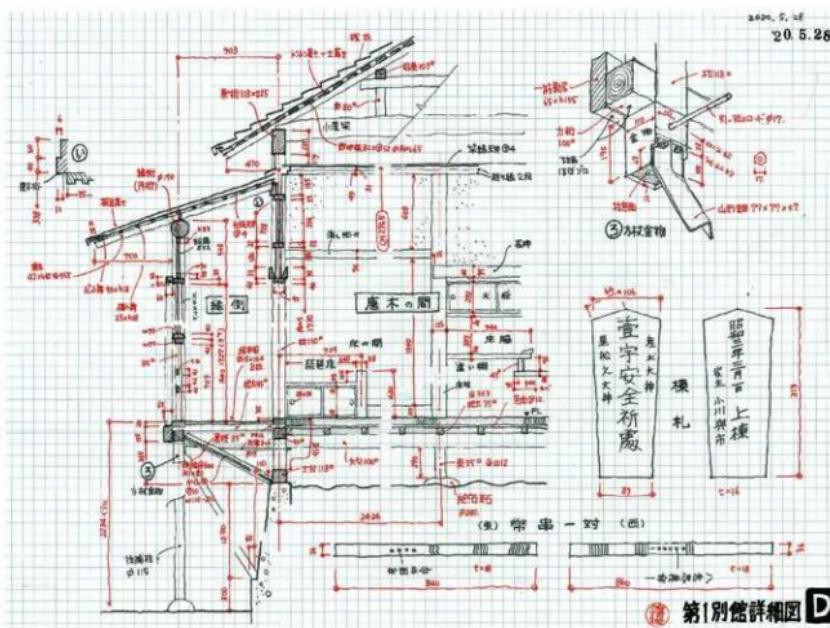
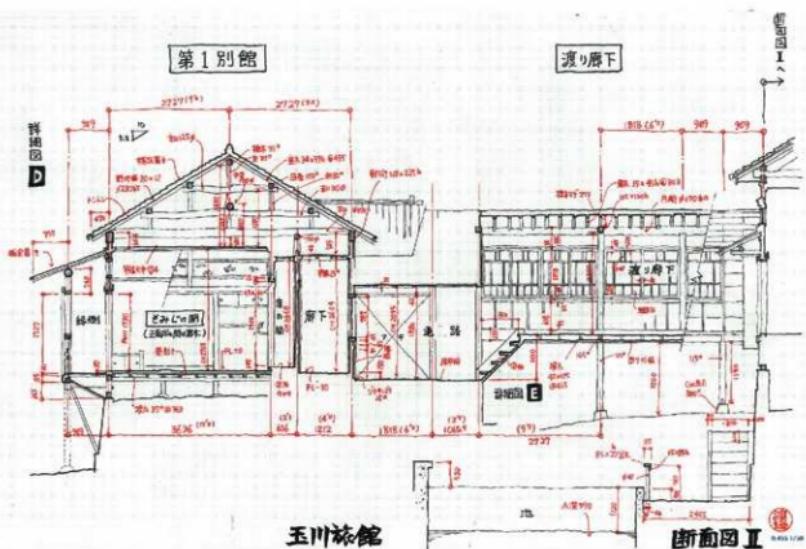
年月日・施主・棟梁や施工者が記され、一般的に小屋裏の棟に近いほぼ中央部に取り付けられます。

建物の正面は北を向き、桁行10間梁間4間の入母屋造、和瓦で屋根を葺いています。玄関部分をむくりのある切妻屋根で張り出し、杉皮葺の小庇の上には「雲月」と書かれた扁額を掛けた数寄屋風の柔らかい意匠となっています。北西に張り出した部分は現在便所と洗面所になっていますが、後世に何らかの手を加えた様子が屋根の形状から推測できます。北側からの姿は平屋で、雄大な第二別館とはまた違った趣があります。一方南側に回ると敷地が1層分ほど下がっているため、高床式になっていて見上げるほどの高さがあります。2階の縁側部分は船の舳先のように斜めに持ち出し、先端を鋼管で支えています。これは建築当初からなのか、後設されたものなのか記録が残っていないので不明です。大工としては柱を立てずに格好よく持ち出したかったのではないかと思います。南西に続く浴室は、戦後新築したものなので、別に説明することにします。



第一別館 南面夜景 ◎

## 第二章 玉川旅館の建築



**客室** 室内の座敷は東から八畳の「見晴」<sup>みはらし</sup>とその北側にある次の間の六畳「月の間」<sup>つきのま</sup>で、この二間には床の間がありません。次の間は長押も回っていません。次に左右対称平面の六畳「もみじ」と「えんじ」があり、北面に奥行の浅い床の間を設けています。そして西端の座敷「唐木」は最も格の高い本床に琵琶棚、床脇を備えた変形の十畳間となっています。「もみじ」「えんじ」「唐木」の部屋名の由来は床柱の樹種によっています。どの部屋も壁は聚染塗、竿縁天井となっています。座敷には南と東に縁側を回し、欄間に東海道五十三次や季節の花鳥を描いたエッチングの装飾ガラスが嵌め込まれています。当时から働いていた方の話によると縁側には建築当初は建具を設げず、欄干だけだったものを、昭和40年前後現在のガラス戸をはめ込んだそうです。座敷と縁側の境は紙障子だけで、縁側東には6枚、南には15枚の雨戸が建て込まれるので、毎日この雨戸を開けたてする仲居さんたちはさぞ苦労したことでしょう。

南の戸袋は奥行が1m

近くもあります。縁側

の丸桁下欄間にには「結霜ガラス」と呼ばれる装飾ガラスが使用されています。「結霜ガラス」は、大正から昭和初期の建物に多く使用され、この頃の建物の特徴になっています。残念ながら戦後製作は途絶えているため貴重なガラスです。第二別館にも使用されています。この4室は鳳凰や松模様など透か



第一別館 座敷「唐木」西面  
琵琶棚と床脇を持つ格式の高い床 ◎



第一別館 横欄 エッチングの装飾ガラス ◎



第一別館 座敷「もみじ」から東の座敷「見晴」方向  
「見晴」の北が「月の間」 ◎

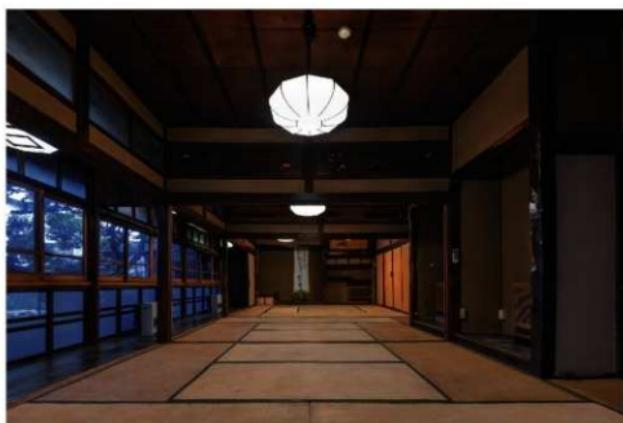


第一別館 縁側の丸桁下欄間 結霜ガラス ◎

し欄間付の、ふすまで間仕切られていますが、ふすまを外すとほぼ30畳敷きの大広間になります。第一別館座敷は、南の障子を開け放すと晴れた日には東京湾越しに富士山を眺めながら、東海道五十三次の欄間をめでることのできる風流な空間でした。ビルのなかつた時代を想像すると、今でも海からの涼しい風を感じるような気がします。

客室から浴室へ 「唐木」の間、西側床の間の裏は浴室につながる4尺幅（約1.2m）の廊下となっていて、その更に西側は、南北に通り抜けのできる布団部屋、釜焚き人が住み込んでいた部屋で、裏方のゾーンとなっています。布団部屋の内部は床、壁、天井とも亜鉛引き鉄板で覆われています。防虫、防湿を考慮していたのでしょうか。廊下の南は広い板の間になっており、浴室に続く前室のような役割を果たしています。西側は一段下がったところに洗面所があります。壁を真っ白いタイルで仕上げ、流しの底には青と白のモザイクタイルが市松に貼られ目に鮮やかです。板の間南面の柱は磨き丸太の化粧仕上げとなっていて、現在浴室のある側は、柱木部の風化具合から外部であったことが判ります。柱に見る痕跡から低い腰窓であったようです。雨戸用一筋溝の敷居も残っていることからここは見晴らしも良く風も通る、湯上りに夕涼みのできる場所であったのではないかと想像します。

この洗面所には低い目隠しの手摺壁も残っています。おそらくここから岩風呂に降りるようになっていたのではないでしょうか。

ふすまをはずすと30畳敷きの大広間になる  
「もみじ」から西方向へ「えんじ」「唐木」と続く ◎

**玄関まわり** もう一度玄関を見てみましょう。玄関の間口が2間（約3.6m）と広く、入口の建具も両袖に引き込まれゆったりしている割に靴を脱ぐ土間の面積が非常に狭くなっていることが不自然に感じます。玄関から西の便所に続く廊下のアルミサッシュは後から改修されたもので、「唐木」の間と北側廊下境の壁に雨戸と戸袋跡が残っていること、床の仕上げ切り替えの位置などから推測すると、今より3尺（約90cm）奥行の広い玄関土間があり、現在の北側廊下は外部の土庇であった可能性があります。廊下の西突き当りにあるシーツや浴衣の倉庫には、西の庭に抜ける現在の床より低い位置にくぐり戸が残されています。これも廊下が土庇であった裏付けとなります。しかし復原調査を行っていないため、残念ながら断定はできません。



第一別館 玄関 戸を引き込み中を見る ◎



第一別館 玄関 西方向 ◎



第一別館 浴室 南東から見る ◎



第一別館 浴室 西外観 ◎

**浴室** 第一別館浴室は鉄筋コンクリート造2階建の2階部分が浴室と脱衣室になっています。前述のように、第一別館西南の板の間から緩い斜路で2階脱衣室に入ります。1階は柱だけの外部空間になっており、機械類が設置されています。この場所には元々岩風呂がありましたが、社長の了さんが生まれた昭和23年（1948）頃、現在の姿に建て替えました。戦前も鉄筋コンクリート造の建物は建築されていましたが、第二次世界大戦により、昭和13年（1938）には「物資統制」により民間の鉄筋コンクリート使用が禁止されました。戦後鉄筋コンクリート造建築が本格的に再開するのは、一般的に朝鮮戦争特需の昭和25年（1950）頃からと言われています。まだ焼け跡で暮らす人もいた時代に浴室を鉄筋コンクリート造で建て替えるということは先駆的で、玉川旅館に経済的な裏付けと集客の見通しがあったからだと思われます。

規模は1階は東西に1間（約1.8m）間隔に1尺（約30cm）角の4本の柱が等間隔に立っていますので幅3間（約5.4m）になります。南北は2.5間（約4.5m）で、柱間も柱や梁の寸法も尺貫法が用いられて建築されています。2階は勾配の急な片流れ屋根の形状をそのまま室内天井にもあらわし、開放的な高い天井になっています。1階外壁はコンクリート打ち放し、2階は腰壁を鉄平石の乱形石張り

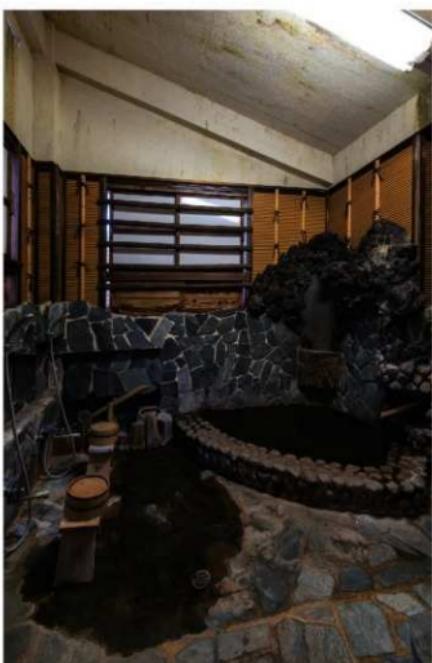
とし上部はモルタル塗り吹き付け仕上げとしています。脱衣室の床は現在カーペット敷きとなっていますが、浴室との境に流し底面と同質の緑色モザイクタイルが残っていることから当初はモザイクタイル張りであったようです。壁と天井はコンクリートモルタル塗り吹き付け仕上げです。浴室は床を鉄平石乱形石張りとし、壁、天井は脱衣室同様モルタル吹き付け仕上げとなっています。現在岩風呂風になっていますが、当初からであったかどうかは不明です。脱衣室とボイラー室に使用されていたスチールサッシュは当時のもので、浴室のアルミサッシュも建築時には縁の細いスチールサッシュが使用されていたと思われます。脱衣室の大きな窓はひとまず25cm角ほどの細かい格子で構成され、中央がすべり出しで開くようになっています。戦前のモダニズム建築などでも使用された形状です。南と西側にバルコニーを持ち出し、簡素なスチール製の手摺がついています。バル

コニーの床も腰壁同様

鉄平石の乱形石張りと

なっています。この頃は南に高い建物がなかったので、2階からは海が見えました。明るく見晴らしの良いモダンな浴室は話題になったことでしょう。

この浴室の建築後、「玉川旅館」は昭和23年(1948)に公布施行された「旅館業法」による旅館業許可を取得しています。



第一別館 浴室 ◎



第一別館 脱衣室 ◎



第一別館 脱衣室 スチール窓 ◎

## 癒しの時間の“おもてなし”～玉川旅館の温泉～

玉川旅館には、地下から掘り上げて温泉を加温した天然温泉「湊温泉」があり、宿泊客や宴会利用客にとても親しまれました。旅館内には、第一別館や第二別館、本館など至る所に風呂があり、家族みんなで入浴できる風呂、外の空気に触れながら温かい湯に浸かれる露天風呂など様々な種類の温泉がありました。その場所ならではの雰囲気を感じながら、楽しいひと時を送っている情景が目に浮かびます。昭和38年（1963）の千葉県衛生研究所分析の温泉分析成績書には、「淡黄褐色澄明にしてアルカリ性を呈す」性状と記載されており、単純泉の泉質で、神経痛や関節等の障害、疲労回復など様々な効能が施されていました。戦前に発行された絵葉書には、「ラヂューム浴場」と紹介されており、利用する方々に、心身ともに日々の疲れを癒す特別な時間を与えてくれる温泉であったと感じ取れます。



本館にある円形の露天風呂 ◎



別棟の隣にある縱長の広い露天風呂 ◎



別棟にある檜の風呂 ◎



別棟の隣にある円形の露天風呂 ◎



第二別館 1階にある風呂

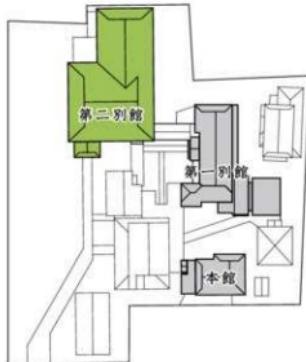


第二別館の全景 旅館ならではの趣のある情景を醸し出している ◎

第二別館

玉川旅館の建物中で、最も大きいのがこの第二別館です。高くそびえる大きな入母屋造の屋根には  
燐し銀の棟瓦が葺かれ、大棟両端の鬼瓦に施された「玉川」の文字が高らかに旅館の名前を告げて  
います。木連格子の施された妻壁（屋根の三角の部分）はまるで御殿のようです。

第二別館が建てられたのは、昭和8年(1933)



第二別館 棟札  
高さ 992mm  
肩幅 290mm  
厚さ 10mm

西園 里吾  
上棟 聖朝八年五月二日  
請負人 白井 保四郎  
設計者 田久保 政吉  
施主 小川 興市  
上棟 施主 小川 興市  
左方山 村田 治一  
右方山 村山 隆吉  
舞鶴 山岸 勝  
武力山 村山 順  
城山 須藤 長  
御前山 佐藤 駿  
兵工 久保 重  
久保 重  
上棟  
聖朝八年五月二日  
高橋 夫  
吉  
九山  
古  
石井  
九山  
吉  
土工  
植草  
金義  
材木商  
平岡  
達  
建物業  
金子  
仁平作  
左方山  
村山 治一  
右方山  
村山 隆吉  
舞鶴  
山岸 勝  
武力山  
村山 順  
城山  
須藤 長  
御前山  
佐藤 駿  
兵工  
久保 重  
久保 重

第二別館棟札下し書

であることが、西屋根の屋根裏のはば中央で発見された。玉川旅館創業者的小川與市を施主とする棟札よりわかりました。書かれた職人の名前には、この地域に見られる名字が含まれています。建物は、雨戸戸袋のあるところ以外のほとんどがガラス戸で囲まれてるので室内は明るく、窓を開け放すと海風が吹き抜けます。夜になると、窓と欄間に橙色の室内の明かりが灯されて、まるで灯籠のようです。妻に飾られた玉川のネオンサインが赤く点滅し、懐かしさを誘います。多くの人々の記憶がここに詰まっているのです。

**構造** 和風の印象の強い建物ですが、これは2階だけです。木造の2階を支える基礎を兼ねる鉄筋コンクリート造の1階部分は窓も少なく、室内窓廻りの作は洋風です。コンクリート壁は外側も内側も打ち放しのままで、よく見ると「型枠埋板」の幅や木目が表面に残っています。今こそ打ち放し「仕上げ」と呼ばれていますが、当時のコンクリート壁は表面にモルタルを塗って仕上げるものでした。窓はコンクリートを打つときに穴を開けたままの状態で、まるで現代の建築のように外部の周囲に装飾はありません。

荒々しい表情の重々しいコンクリート造と、この上にのる軽やかで開放感に満ちた近代的な木造とが、対比されながら調和するように巧みにまとめ上げられています。

屋根の構造は、玄関の突き出す西側の屋根とこれに直行して大広間にかかる東側の屋根からなります。両方の屋根は交差して、屋根裏は一体となっているのですが、それぞれにふさわしい異なる構造が使い分けられています。西屋根は、部材を縦横に組み合わせた日本の伝統的な大工仕事「和小屋」で造られています。

それに対して東屋根には、大きな部屋を覆うのにふさわしい西洋から導入された建築技術「トラス構造」が使われています。比較的小断面からなる木の部材を効率良く三角形に組み合わせたトラス構造は、学校の教室や講堂、または倉庫のように柱のない大きな空間に利用されます。屋根面を構成する野地板には製材所の印が押されたものも見られました。



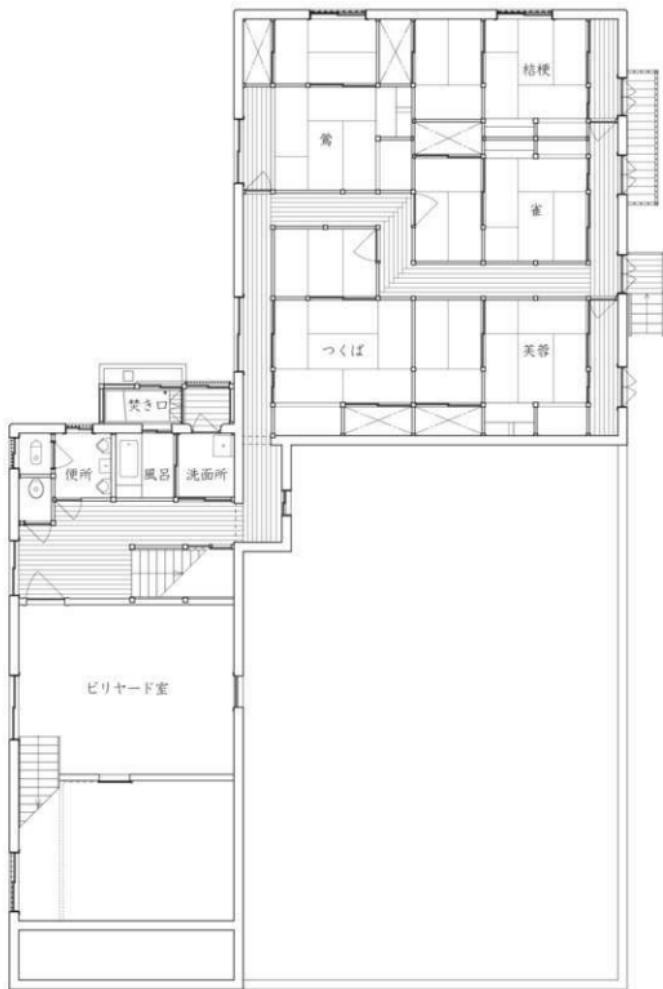
第二別館 鬼瓦 ◎



第二別館 南面 鉄筋コンクリート造の壁 ◎



旧本館が火災にあう2～3年前に撮影した第二別館（画面右）

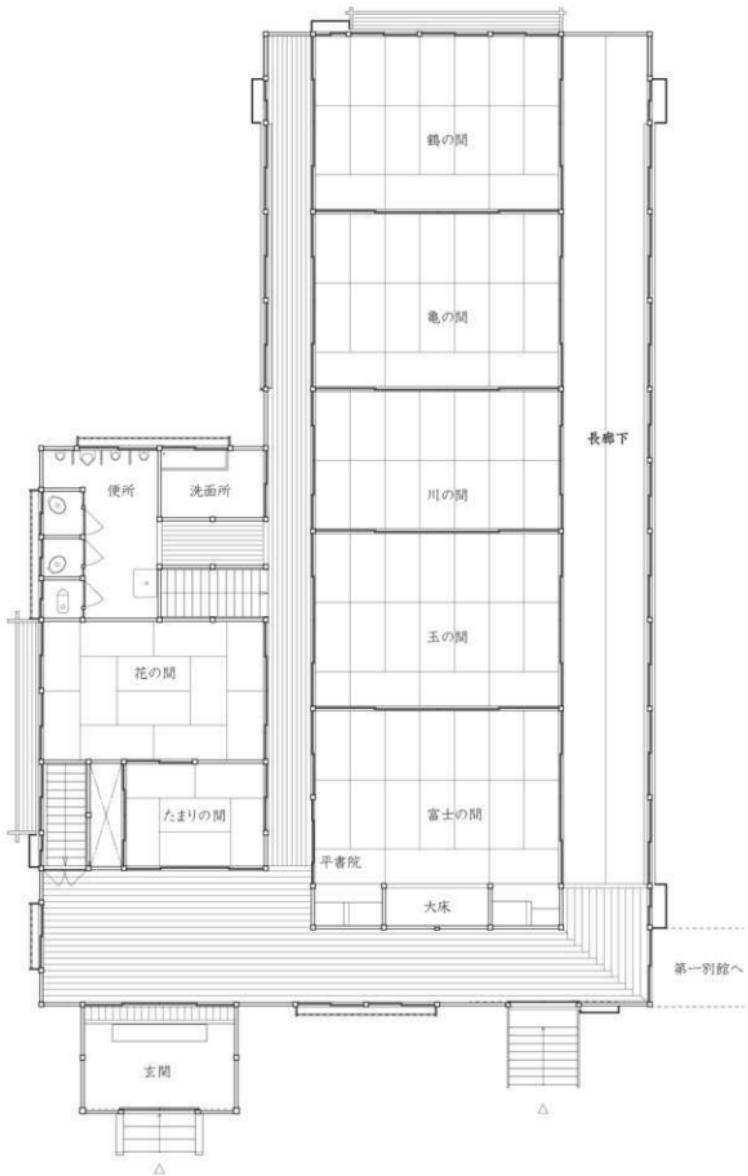


1階



0 5m

玉川旅館 第二別館平面図



2階

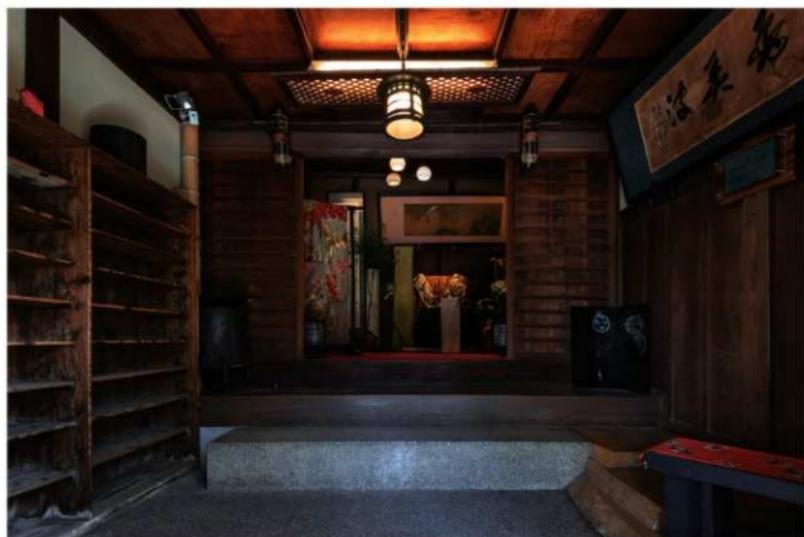
**平面計画**　当時の木造の建物はほとんど、尺寸を単位として建てられました。玉川旅館の各建物もそうです。2階広間の柱配置は、3尺四方を整然と並べた寸法で計画されたことが、現地の実測よりわかりました（1尺=10寸=303mm）。建設当時の図面資料は残されていませんでした。2つのコンクリート造の長方形の角を梁で繋いだ1階の平面は、瓢箪<sup>ひょうたん</sup>のような形をしています。ここを境に東側にビリヤード室と水廻り、西側に客室が配置されています。1階では厚いコンクリート壁の中に入れ子状に客室を配置する必要がありました。この分、廊下の幅が一般的な3尺より狭くなっています。また、壁の外側は地面に垂直に立ち上がっているのに対し、廊下に面する内側では壁の下方を厚くするために、壁面は緩く斜めに傾いています。内側の窓枠の壁との取り合いを見ると、このことがよくわかります。

玉川旅館の敷地の大きな起伏が第二別館の繁ぎ目のあたりにあり、玄関から西に進むにつれて地面が低くなります。ゆえに第二別館2階大広間の西半分の下には1階がありません。1階と2階の平面図を比べると、2階の方が面積が大きいことがわかります。

第二別館の1階客室の南側にある池は、平成3年（1991）に隣地の消防署が拡張されるまでは、この3倍の大きさであったと言います。

**2階**　これから各部屋の細部に目をむけてゆきます。第二別館が建てられた昭和初期の時代が色濃く映し出されています。

**玄関**　第二別館の入口には、「玉川旅館」の正面玄関であることを示す大きな表札が掲げられています。まるで西洋館にあるような花崗岩の石段を登り、腰上を大きな一枚ガラスとする重厚な扉の



第二別館 玄関 室内 ◎

戸を引き分けて玄関に入ると、別世界が開けてきます。土間を小粒の那智黒石の洗い出し仕上げとする玄関には櫛材がふんだんに用いられ、天井は格式の高い格天井に紅葉材の化粧合板の板を市松に張り、壁は肩の高さまでの板張りで覆われています。

外階段と同じく花崗岩の畠脱ぎ石の上で履き物を脱ぐと、室内でゆったりくつろぐ気持ちになります。玄関から入ったところが2階で、この下に客室と娛樂室のある1階があります。

**玄間** 本日の宴会はどの部屋で行われるのでしょうか。玄前の幅の広い廊下を挟んで北側の縁を進むと、長押の廻された赤壁の和室が5部屋並んでいます。すべての襖を取り外すと、正面に大床のある84畳敷きの大広間になるのです。いずれも杢目板の竿縁天井です。玄間に近い「富士の間」(17.5畳)には、両側に床脇を設けた大床が設けられ、この部屋を最も格式の高い造りとしています。幅1間半(約2.7m)・奥行3.5尺(約1.1m)の床の床柱は紅葉、落とし掛けは櫛、畳床の床框は黒漆塗。北床脇には天袋と違い棚、南床脇には天袋とそれぞれ高さ及び奥行の異なる地袋が並び、高い方の地袋天板には筆返しがついています。両床脇とも地板は杉材です。



第二別館 玄関 外観 ◎

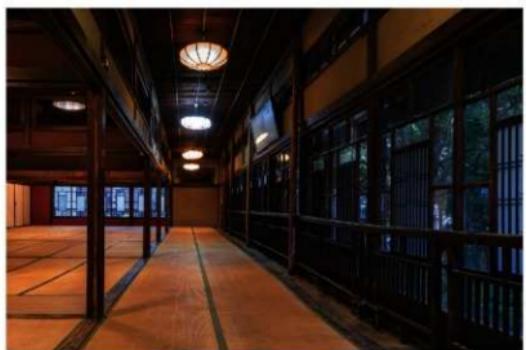


第二別館 2階 「鶴の間」 襖を外すと大広間になる ◎

廊下沿いには障子建具の小組細工で富士山となびく雲を描いた大きな平書院、この欄間は炭欄間の中央に松皮菱格子が配されています。

部屋境の襖は取り外されていますが、昔の写真には幅広の襖戸が見られます。

奥に続く部屋一 手前から「玉」・「川」・「亀」・「鶴」(それぞれ17.5畳、但し中央の「川の間」は14畳)一の欄間に極細い豎格子とも言え



第二別館 2階 大広間と南側の長廊下 ◎

る炭欄間が設けられ、天井は竿縁天井です。いずれの部屋も赤色の壁によって、たいへん華やかな雰囲気がもたらされています。

北側に先ほどの縁、南側には料理の運ばれてくる幅の広い「長廊下」があり、両方とも外部に面する側には手すりが廻されます。これらの縁及び東面の窓にも、小割りガラスからなる欄間と引違窓が建て込まれ、外側の雨戸で戸締まりされます。

他の部屋 広間の他に、玄間に向いて続く6畳の「たまりの間」と12畳の「花の間」があります。「たまりの間」は広間に案内される前に通された部屋あるいは帳場だったのでしょうか。この部屋には古い襖戸が残っています。「花の間」は、周囲の部屋の間取りに影響されて変則的な寸法からなる畳敷きの和室です。「たまりの間」の北側に、後述する1階に至る階段があり、この入口には細工の細やかな両開きのガラス戸が見られます。



第二別館 2階 「富士の間」 最も格式の高い大床 ◎



第二別館 2階 富士山などを描いた平書院 ◎

第二別館の南面西端に、第一別館へと続く渡り廊下があり、この手前の西面には、別棟の台所と行き来するための鉄製の外階段があります。かつては木製の階段で、出入り口には窓の意匠と揃う小割りガラスの嵌められた引違のガラス戸があった様子が古写真に見られます。



第二別館 2階 小割ガラスからなる引違窓 ◎

**洗面所・便所** ガラス戸を引き開けて、床・腰壁・流しのすべてがタイル張りの洗面所に入ります。霜が張ったように表面が加工された結霜ガラスは、明かりを通しながらも視線を遮る製品として、大正期から昭和初期に広まりました。このガラスは、ビリヤード室に降りる階段・1階便所、洗面所出入り口の建具にも見られます。

西壁に大きな鏡が張られた洗面所の腰壁は清潔感あふれる白タイル、床には青と白の小タイルが市松に張られ、流しの底は水色とし、目が覚める色合いで。タイルは大正12年（1923）に発生した関東大震災以降、衛生観念の普及とともに急速に広まった経緯があり、玉川旅館の建設はまさにこの時期にあたります。



第二別館 2階 洗面所 ◎



第二別館 2階 洗面所の出入り口と流し ◎



第二別館 洗面所出入り口ガラス建具上方の組子細工 ◎



第二別館 2階

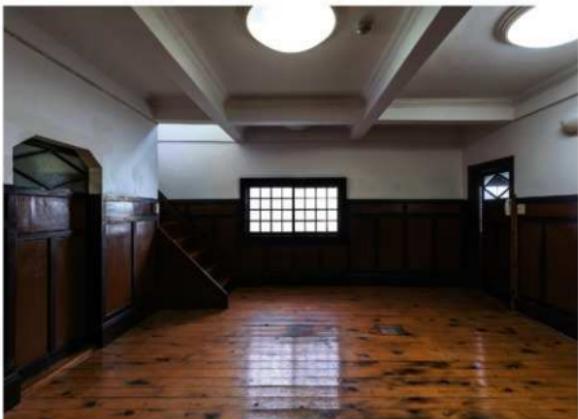
洗面所の壁に使用されていたタイルの裏側の刻印  
「M.S. TILE WORKS MADE IN JAPAN」 ◎



洗面所の床 青と白のタイルが市松に張られている ◎

## 1階 ビリヤード室

この建物で唯一洋風にしつらえられた部屋です。白く塗られた大壁（柱を見せない壁の構造）と2階の床の構造を塗り込みで意匠とする天井は昔のままで、区画された天井面の周囲には、左官仕事による蛇腹が施されています。腰壁は洋風のパネル張りで、額縁の中に当時高級品であったベニヤ材を張り、ワニス塗仕上げとしています。



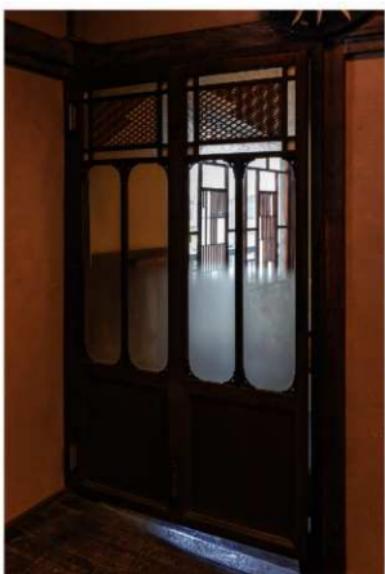
第二別館 1階 ビリヤード室

玄関ホールに直接つながる階段がある。床にはビリヤード台脚の跡が残る ◎

壁に使用されていた5寸角（約15cm角）のタイル裏側の刻印より、月星建陶社（名古屋。月星=Moon Star）の製品であることがわかりました。

便所は、洗面所と階段との間の廊下の先にあります。この出入り口の額縁には、自在丁番が上下に残っていることから、かつては便所の内外どちら側にも開く戸がついていたことがわかりました。

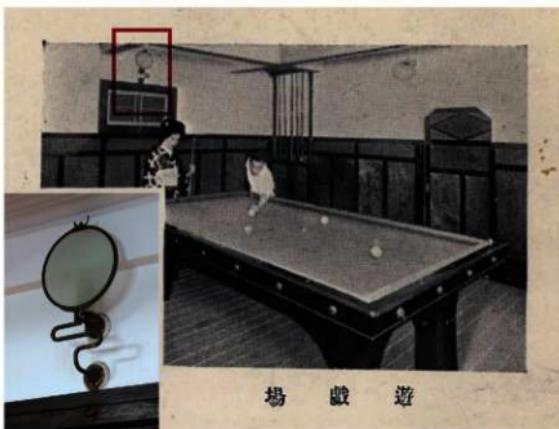
**照明器具** 昭和初期には電気が既に通っていたので、この建物には当初から電気照明器具が取り付けられました。残されていた数少ない照明器具のうち、玄関ホールの和風ペンダントは当時流行したデザインのものです。一方、廊下の照明器具は役所建築にも見られた実用的なグローブ型で、部屋によって意匠の異なるものが選ばれていました。玄関脇の壁には長年使われてきた分電盤や廊下には電気スイッチがあります。



第二別館 2階 玄関ホール  
1階へ降りる階段前の扉 ◎



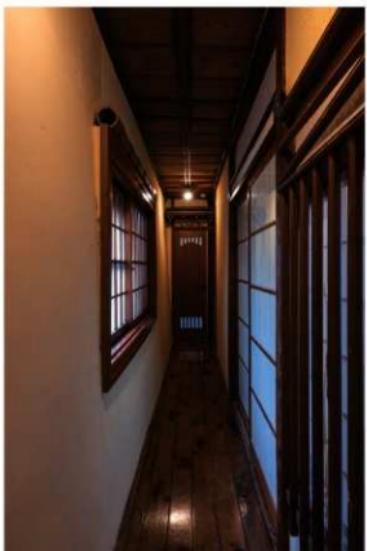
第二別館 ビリヤード室へ続く階段  
窓から柔らかな光が射し込む ◎



### 場 戲 遊

第二別館 1階 ビリヤード室の様子  
絵葉書には、ビリヤード台や球撞き棒を並べた小棚が見られる。  
絵葉書に写る照明器具は、今日まで残っていた ◎

**階段室** 建物に2箇所ある装飾のない階段は、両階の行き来を行うことに重点を置いたものとなっています。ひとつは北廊下の中央あたりで、便所への廊下に並んであります。ここを降りた先右手奥に客室、先に進んだ左手にビリヤード室があります。もうひとつの玄関前廊下の階段は直接このビリヤード室へと続いています。上階の喧騒を避けて少人数で時間を過ごすための動線が用意されているのです。



第二別館 1階 廊下  
コンクリート壁は下方が厚いV字型になっている ◎



第二別館 1階 外への扉 ◎

南壁上方にある満月型の磨りガラスを前にかかげた独特なかたちの照明器具から室内に明かりが放たれます。このような照明は、ビリヤードに興じる目にまぶしい光が入らないようにする配慮でしょう。この器具の下の窓からは、土地の起伏に応じてここでは高い位置にある床下がのぞけます。

この部屋の奥の部屋は竿縁天井で、鶴居が残ることから階段下がかつては廊下であったことがわかり、倉庫に使われていたものの当初は和室であったと思われます。

廊下へ ビリヤード室から東側の廊下へ出ると、廊下を挟んで洗面所・風呂・便所があります。これらの室内は後年改装されており、当初の姿は明らかでないのですが、壁のタイルや外側に差し掛けで取り付く焚き口、あるいは2階の洗面所と便所の位置と重なることから、ここに水廻りの空間がまとめられ、部屋の規模もおおかた現況と変わらない状況であったことがわかります。第二別館より先に完成した第一別館の風呂場では大きな湯船に浸かれたので、こちらには小さな風呂だけが設けられたことと想像されます。食事と風呂をあわせて提供していた玉川旅館には、第一別館の西側に新檜風呂とサウナの新築、本館にも露天風呂が設けられ、入浴場所にはこと欠きません。

客室 1階には5室の客室があり、部屋の大きさは4畳半（4室）または6畳（1室）で、畳敷きの各客室へは廊下に面した引違の障子戸から出入りします。この脇に設けられた平書院にちょうど自然光が入るように、廊下のコンクリート壁の窓はこの前に開けられています。窓は北側には腰高より上を引違、南側には出入りできる高さの両開きの扉が取りつけます。

手前の部屋には床、部屋によっては床脇が取り付き、天井はそれぞれ異なる意匠です。平書院の障子と欄間建具にも部屋ごとの違いが見られます。

奥には、換で間仕切られた3畳間が寝室として用意されています。

昭和50年代の改装で、奥の部屋から廊下への開き戸を新設したり、部屋に廊下を取り込んだりして、面積を広く開放的にされた部屋もあります。そのような変化の中でも、床廻りと平書院や天井造作についても建築当初のまま使われてきました。

1階の平面を復原してみると、利用客が互いに顔を合わせにくいうように、迷路の奥に各部屋が配置されていることがわかります。



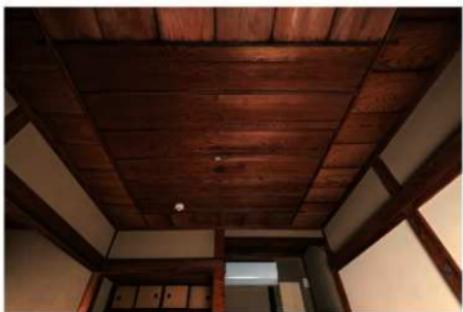
第二別館 1階 「つくば」 ◎



第二別館 1階 「雀」 ◎



第二別館 1階 「雀」  
平書院 ◎



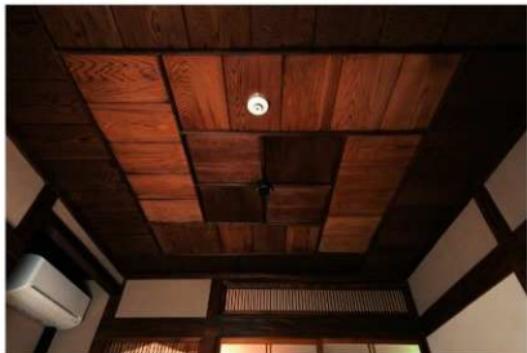
第二別館 1階 「鶯」 天井 ◎



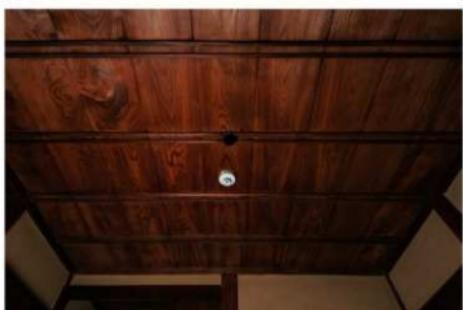
第二別館 2階 玄関ホールの和風ペンドント型照明 ◎



第二別館 2階  
玄関 照明 ◎



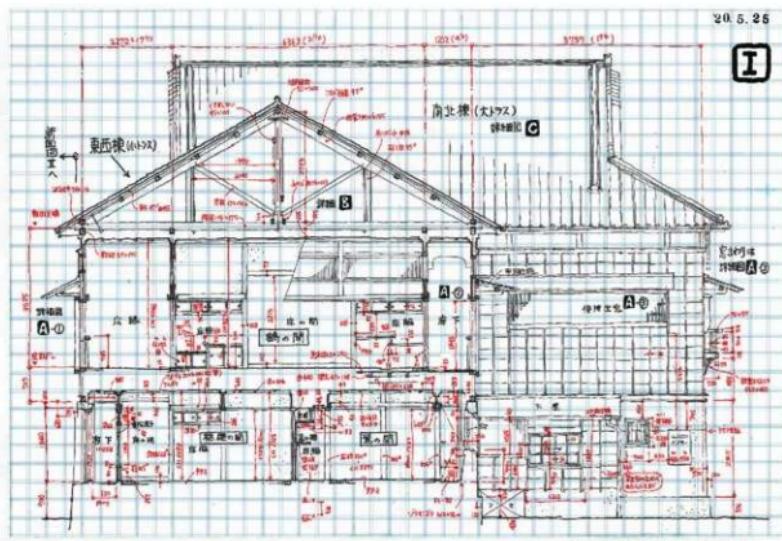
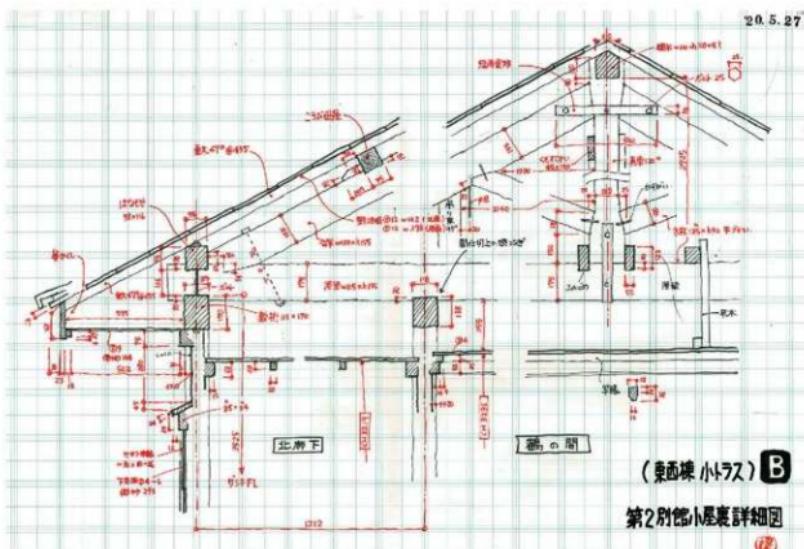
第二別館 1階 「雀」 天井 ◎



第二別館 1階 「芙蓉」 天井 ◎



第二別館 2階  
廊下のグローブ型照明 ◎



鶴の間から西大床を見る、コンクリートの厚い壁に納められた下階には、「桔梗」「鶯」の間がある。右側に張り出しているのは、1・2階の水回りを集めた浴室と便所



第二別館 1階「桔梗」の間 床と平書院を見る。文豪太宰治が宿泊したと伝わる ◎

太宰の部屋 1階南東隅の「桔梗」の間に、昭和初期に船橋在住であった太宰治が滞在したと言われています。南側の細い廊下の突き当たり、旅館の最も奥まった場所であることから誰にも邪魔されない、心地よい場所であったのは間違いないでしょう。

「桔梗」の間は、1階の他の間と同様、廊下側の居室と奥の3畳間からなります。手前の四畳半の客室には長押が回され、床脇のある床を設け、いずれも聚楽室で仕上げられています。他の部屋と比べて際立っていることもあります。これに対して、簡素に造られた奥の部屋には押入があり、休むための部屋となっています。「桔梗」の間には外部に面する窓があると言えども、厚いコンクリート壁にうがたれた穴のようで、明るく風通しのよい部屋ではありません。

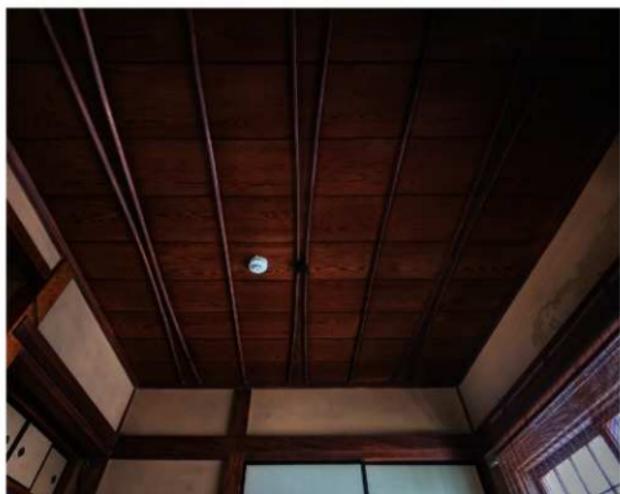
客室の細部に注目すると、控えめながらも凝った造作が見られます。部屋の焦点となる床には上階広間の大床と同じモミジ材が使われ、床脇の天袋の建具には金砂子の襖紙、周囲に雷門が施された小さな菱形の引き手中央には長寿を象徴する養龜と波が施されています。床脇の床は、畳と高さが揃う地板です。なお、床の隅にはガス栓があり、暖房に使用したものと思われます。

また、廊下側の平書院では、欄間障子に菱形と格子を重ねた耕繁ぎ、両脇に吹き寄せた縦格子の障子戸の下方には蜀江文様を取り入れています。廊下外側の壁には、ちょうど障子戸に外から光が入る位置に窓があり、手の込んだ細工が室内に映えます。

天井は、松葉状に並べた曲線からなる猿棒面の竿縁に、杉杔目板の天井を張ります。



第二別館 1階  
「桔梗」の間  
床脇天袋引手の  
蓑龜と波



第二別館 1階 「桔梗」の間 天井 ◎



第二別館 1階 「桔梗」の間 奥の3畳間が垣間見える ◎



第二別館 1階 「桔梗」の間の奥にある三畳間 ◎



第二別館 1階  
「桔梗」の間へと続く細い廊下 ◎



「桔梗」の間がある第二別館 画面中央の樹木の奥に玄関がある ◎

## 太宰治と船橋・玉川～文豪の残した足跡巡り～

太宰は短い期間ですが船橋で生活していました。昭和10年（1935）7月、26歳の時に、東葛飾郡船橋町五日市本宿一九二八番地（現、宮本1丁目12-8）の新築の借家に移り住みました。この頃の太宰は、大学に落第し、自殺未遂を起こし、さらに、4月には盲腸炎をこじらせ腹膜炎となり、その鎮痛剤バビナールによる中毒に陥っていました。療養のための船橋移住でした。この時、旧制弘前高等学校時代に知り合った内緒の妻の初代も一緒にいました。

ちょうど、船橋で生活していた時期に太宰が、玉川旅館の「桔梗」の間に20日間に渡り、宿泊したと伝わっています。その際、宿泊代が支払えず、宿泊代のかわりに万年筆とフランス語の辞典を置いていったそうです。この万年筆と辞書は昭和51年（1976）に旧本館が火災になった際に焼失してしまった、現存していません。

療養のための船橋での生活でしたが、バビナール中毒を断つことができず、症状の悪化を心配した家族が井伏鱒二に説得を依頼し、昭和11年（1936）10月に東京の病院へ移ることとなり、約1年3ヶ月の船橋での生活が終わりを迎えます。

船橋在住の間、太宰は昭和11年（1936）に最初の短編集『晩年』を刊行するなど、数々の作品を発表しました。後の著書である『十五年間』に「私には千葉縣船橋町の家（＊宮本1丁目の旧宅のこと）が最も愛着が深かつた。私はそこで、「ダス・ゲマイネ」といふのや、また

「虚構の春」などといふ作品を書いた」と記されているように、度々居所を変えた太宰にとって、玉川旅館を含む船橋は、特に思い出深い土地であったことが窺えます。



太宰治旧宅跡近くの海老川に架かる九重橋に設置されたレリーフ



市内には、太宰治旧宅跡に建つ説明板と石碑が残っている



太宰治旧宅跡から移植した  
夾竹桃と石碑（船橋市中央公民館前）

## 「玉川旅館」創業時の建物 ~旧本館~

### 史料に見る昔の姿

「玉川旅館」の創業当初ここにどのような建物があったか、残されている絵葉書や写真、登記簿などをつなぎ合わせ、考えてみました。

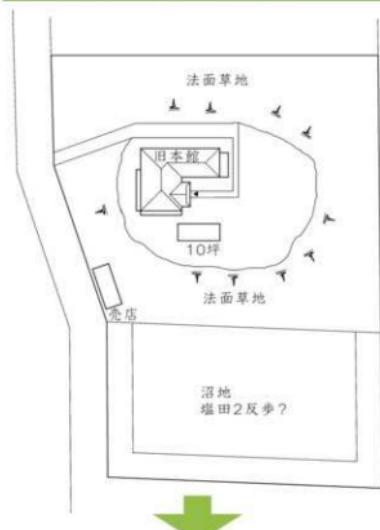
明治41年（1908）小川歓蔵が亡くなると、息子の與市は翌年不動産を相続し、塩田2段歩、木造瓦葺平屋、建坪52.36坪、木造瓦葺平屋10坪の物置を2棟登記しています。その後大正10年（1921）料亭「玉川」を開業しています。その時の建物は登記簿に記載された52.36坪の平屋であったと思われ、昭和51年（1976）の火災で焼失するまで改修を加えながら、ありました。玉川旅館の女将の與子さんも「明治時代の建物」と伝え聞いていました。

この建物の最も古い写真は第一別館ができる前の「玉川旅館絵葉書」で、L字型の平面で寄棟造瓦葺になっています。大屋根から張り出した玄関のような張り出しが、戦後の写真にも見られます。



「千葉県船橋町鳥瞰図」松井天山  
昭和2年（1927）9月より、「玉川」の部分を拡大

### 明治42年頃～昭和2年の玉川旅館

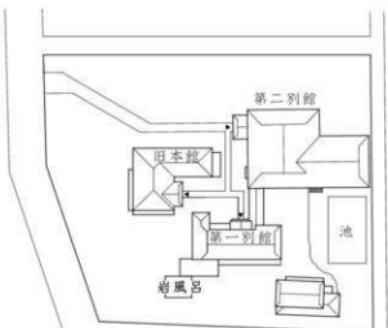


### 昭和3年 第一別館ができる頃

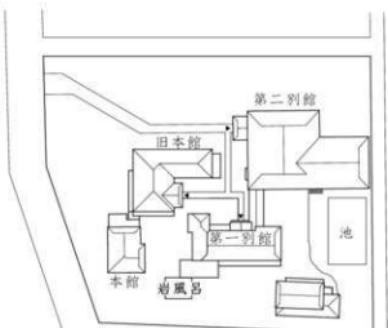




昭和8年 第二別館ができた頃



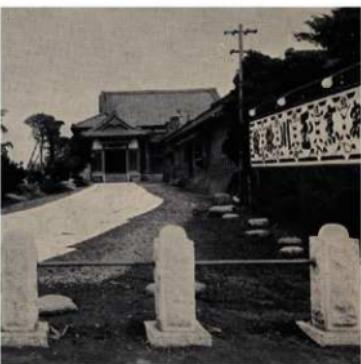
昭和16年 本館ができた頃



同じ頃昭和2年（1927）に松井天山が描いた「千葉県船橋町鳥瞰図」の「割烹旅館玉川」は直交する寄棟造2棟のように描かれていますが、おそらくこれは一つの建物で、南側に描かれている建物は第一別館の前身建物だと思われます。「物置」と登記簿に記載されている10坪の建物の一つかもしれません。天山図には「売店」という書き込みもありますので、これがもう1棟「物置」と登記された建物であったかもしれません。

次に古い写真は現在の第二別館が写っている絵葉書で、外構が整備されたばかりなので、おそらく第二別館ができた昭和8年（1933）頃の写真です。創建当初の建物を「本館」と呼んでいました。現在の「本館」と間違わないように「旧本館」と呼びます。

絵葉書には「旧本館」の北側が見えます。出窓や下屋庇の付いた出入り口らしいものも写っています。窓幅や下見板の押し縁の数から推測すると、北面は9間半で出入り口の東側部分には、屋根に煙を出す引き窓が付いていることから、台所であったことがわかります。この下にかまどがあったと思われます。



昭和8年（1933）頃の絵葉書  
右に「旧本館」、正面に「第二別館」が見える



旧本館と本館の取り合い部分  
(接続部分)。女性は正子さん  
昭和35年(1960)頃



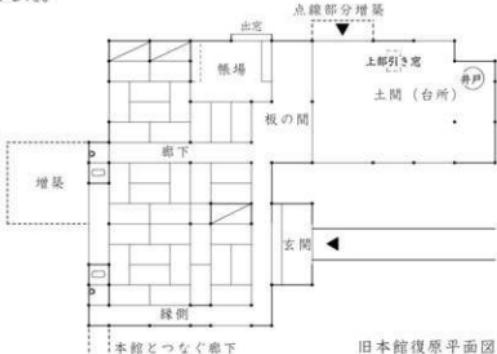
旧本館が火災にあう2～3年前に消防署あたりから撮影した写真。  
中央右の大きな建物が第二別館、左が第一別館。その背面が本館。中央にある  
建物が旧本館

戦後の写真を見ると台所は「旧本館」から独立させるように屋根まで壁を立て、モルタル塗りに改装されています。火災にあう2～3年前に消防署あたりから撮影した鳥瞰写真を見るとその頃の形状がよくわかります。この頃は「旧本館」と「本館」はつながっていました。

### 旧本館の変遷

以上のことから「旧本館」改変の経緯は、以下のように考えられます。

寄棟造平屋瓦葺で東にL型に張り出した部分は台所でした。ここは土間で井戸もありました。現在の中庭に面して間口2間の玄関張り出しがありました。それは昭和51年(1976)の火災までありました。西側に一部屋増築。第一、第二別館が建つと中庭側の玄関が使いにくいため、時期は不明ですが、台所の出入り口だった部分を張り出して、玄間に改修。戦後のある時期に台所部分をモルタル仕上の陸屋根風に改修。昭和51年(1976)の火災後「旧本館」を2階建てに建て替え、台所(調理場)と「本館」を各々切り離して独立させました。「旧本館」の平面は屋根形状と與子さんからの聞き取りで、下図のように復原してみました。



旧本館復原平面図

## 第二別館の盛土と松杭

玉川旅館の敷地は、各建物の玄関がある中央部が高く、本館から第一別館の南が低くなっています。本館脇には南へ下る階段があり、その先に別棟の風呂がありました。

このあたりは、もともとは葦原や田圃が広がる低地で、干潟を埋立てて塩田を造成し、隣地の土地をかさ上げして、塩田の経営者宅が建てられました。

玉川旅館の場所には、三田浜塩田の経営者の一人であった小川紋蔵の旧宅がありました。小川紋蔵は、玉川旅館創業者の父です。

昭和2年（1947）の松井天山「千葉県船橋町鳥瞰図」（P6）をみると、塩田の北側、

池のようにみえる部分をはさんで、一段高い場所に玉川旅館の建物があったことがわかります。

第二別館を解体したところ、建物基礎の下は赤土で盛土がしており、さらに下から大量の松杭が見つかりました。

見つかった松杭は、長さ約3.2m、直径18~20cmで、先端が尖っていました。杭の正確な位置の記録はできませんでしたが、規則的に打ち込まれていました。松杭を抜くと、水が染み出したそうです。

女将さんと社長さんに伺ったところ、第二別館を作る際に、東金から土を運んでき、松杭を300本打って、地盤を強化したと聞いていたとのことでした。また、この松杭に水を送らないといけないので、池を残していたとのことでした。

第二別館が建てられた昭和初期に、トラックで東金からこれほど大量の土を運び、地盤補強のためにたくさんの松杭を手配するなど、たいへんな土木工事だったのではないかという。



盛土の下には先端を尖らせた松杭が打ち込まれていた



0.5m等高線を引いてみると、かさ上げした土地と建物の関係がわかります



第二別館南側の池（左の建物は第二別館）  
基礎の松杭に水が送られるように池を残していたという



## 第三章 玉川の日常

### 玉川旅館の“いま”と“むかし”



社長の小川了さんと女将の長野與子さん

社長 小川 了さん

本館の特徴について 本館の建築は、昭和16年（1941）と伝えられています。お泊りのほかに、少ない人数の宴会でも使っていました。

建物は、概ね大部分に特徴があります。窓の大きいガラスなど、見晴らしが良いようにつくってあります。やはり、どうしても経年劣化がありますので、少しづつ、修理して使っていましたが、本館は建てたときからほとんど、変わっていません。

1階は「五番」、「六番」、「七番」という部屋で、同じつくりの部屋です。使い勝手が良いように、各部屋を隔てている板戸をとって、ひとつの部屋として使うことがほとんどです。

本館のすぐ下は満ち潮になると水が入ってきて、引き潮になると砂場になってしまったそうです。高床式の建物ですので、1階が通常の2階位の高さがあります。雨戸を開けると、お部屋から海がみえたそうです。今はビルがいっぱい建ってしまって、海岸は見えません。隣は現在、タワーマンションになっていますが、そこに三田浜楽園という割烹旅館がありました。

2階のお部屋も同じく数字の番号で、「一番」、「二番」、「三番」と呼んでいます。仕切りを入れて、二つに分けて使うこともできますけど、どちらかというと一つで使う方が多かったです。1階が普通の2階位の高さがあるので、ここは3階位の高さがあると思います。

台風が来ますと、本館が一番風当たりが強い場所にあります。隣にマンションができてからは特に強くなりました。ちゃんと雨戸を



玉川旅館のパンフレット



閉めないと窓ガラスが割れてしまうと思ったもので、毎日、雨戸を準備していました。台風で軒の部分が飛ばされたり、瓦も何枚か飛んでしまったことがあります。

掛け軸などの調度品は、先代や先々代が、買ってきて置いたそうなのですが、由緒がほとんどわからないのです。ずっとこのように飾っています。

「一番」の部屋からは、旅館全体が眺められます。高台で全体を見渡すことができるこの部屋が最も人気があります。お泊りの方では、「一番」のお部屋をご指定される方が多かったです。

間取りは「一番」と「二番」が六畳で、ひとつにすると十二畳になります。「三番」は八畳です。

**温泉について**　お風呂は、温泉のお風呂です。ちょっと色がついています。天然温泉で、昔からありました。海岸に近いので塩っ気が入っていると思われる方が多いのですが、真水に近く、石鹼もよく泡立つような柔らかいお湯です。

昔のこのあたりは宿屋さんがたまつておりまして、温泉街のような感じでした。

源泉は、結構深さがあるらしく、300~400m位の深さから汲み上げているそうです。昔の技術でよく掘れたなと思います。

**高床式の建築**　大潮になりますと、海の水が建物まで来てしまうので、それを防ぐために高床式にせざるを得なかったようです。本館の基礎はコンクリートなのですが、下に降りる階段の脇に石垣があります。これが当時の名残と聞いています。今見える範囲でも石垣は高さ2メートル以上ありますが、地面の下にはさらに石垣が埋まっています。さらに三段ぐらいがまだ埋まっているらしいですが、この石垣に小さい小舟を横付けして、船に乗って遊んでいたと聞いています。このあたりには、小さい船がいっぱいあったそうです。

**第一別館**　第一別館は、玉川旅館の中で一番古い建物です。昭和3年（1928）に建てられたそうです。玄関は、おそらく今残っている建物の中で一番古いと思います。

玄関上の扁額は、「雲月」です。第一別館は、やはり宴会が主ですけども、こここの棟をお泊りで使われる方も結構多く、お好きな方がおられました。30名以上は十分、入ることができます。



飾られていた掛け軸の一部  
(第二別館富士の間)  
川端玉雪「山水図」(船橋市寄贈受入)



風情ある玉川旅館にある温泉の佇まい



旅館内は、建物と緑が共存している

昔は花火が近くで上がっていて、ここから見えたそうです。現在は南側に離れがありますが、ないときは、すぐ先が海岸でした。

昔はクーラーとかない時代ですから、窓開けっぱなしで風通しがよかったです。

今はビルがたっていますが、南西側にも大きい池がありました。もう湿地帯みたいなところで、水が結構多かったです。池は潮で引いた時に残っているというか、そういう感じだったのかもしれません。今は消防署になっているあたりまで池がありました。

いいお湯が出ましたから、このあたりには、結構多くの旅館がありました。東京に近く、西の鎌倉、東の船橋といわれるくらいのリゾート地帯というか、そういった感じだったらしいです。

**旅館の思い出** 調度品ですが、昔は和風の結婚式が多かったので、着物は、貸衣装のように使っていました。それを今は飾っています、結構もちがいいので、ディスプレイとしてうまく使っています。結婚式は、今は大きなホテルで挙げることが多いようですが、そういったホテルが全然無い時代でしたし、和式でやることが多かったので、多くのご利用がありました。式場はうちの方にはありませんが、船橋大神宮さんという神社がお近くにありますので、そこで式をやり、その後のご披露宴をうちの方が担当させていただいていました。

大勢の方があつまる大披露宴ではございませんが、最後に行ったのは今年（令和2年）3月22日です。第二別館の一部を使いました。船橋大神宮さんで式を挙げて、玉川の最後のご結婚式となりました。

若い方でも、こういう和風の建物をお好みになる方が多いです。

やはり、家族的なお付き合いをさせていただいたらしく、もう本当に和やかな雰囲気をつくっていただきて、常連さんになっていただく方が結構いらっしゃいました。それで、もう楽しくやらせていただきました。結構、遠くからもいらっしゃる方がいて、近隣の方もたくさんご利用いただきました。

ここは昔、国道から丸見えでしたが、そこに電信電話局さんが一番最初にできまして、結構高い鉄塔ができました。そのあとはもう都市化の流れで、大体コンクリートの高いビルになりました。それで周りを全部囲まれているような感じになりました。旅館は静かで一番落ち着けるところになりました。レトロな雰囲気がここだけ残ってしまっているというような感じです。ここが静かで落ち着くという感じで、旅館としては本当に静かな環境でやらせていただきました。

映画の撮影にもご利用していただきました。松本人志さんの「大日本人」という映画がございました。その撮影で第二別館の大広間を3日間、貸し切りで使っていただきて、撮影しました。

もう本当に、建物がかなりの年数が経ち、どうしても老朽化といいますか、建物にも寿命がありますので、頑張って直して、直してやってきたのですが、これから先、維持していくのが難しいと感じ、営業していくのをあきらめさせていただきました。



結婚式の様子もパンフレットに掲載されている

女将 長野 舞子さん

玄関 ようこそ玉川に。いらっしゃいませ。どうぞお上がりくださいませ。

ここは第二別館、大広間の宴会場の玄関です。昔の高さですので、ちょっと高さがありすぎてご不自由ですけど、どうぞ。お上がりくださいませ。

大広間 こちらは、大広間の受付とか、婚礼の貴重なお部屋になっております。使い方は多目的です。3月にご家族での婚礼を頂きました、挙式は大神宮であげて披露宴をこの玉川の宴会場を使って頂きました。第二別館は大広間のある建物です。玉川旅館中では二番目に古い、昭和初期の建物です。この間の婚礼の宴会が行われたのもこちらです。昔はこの前は海でございまして、潮風が入ってとても風情がある場所でございました。今は残念なことにマンションに取り囲まれております。

南側の長廊下は仲居たちが通る通りです。

ここは全体を取り払いますと、大広間になります。いろいろな宴会でお使い頂いております。130人ぐらいの宴会は常に全体を使う広さでご利用頂いております。お客様がそのくらいいらっしゃいますと、だいたい10人位の仲居の手がります。私は常に働きバチですから、一緒に入って接客していました。



昔の絵葉書からは、大広間が大きく写し出されており、部屋の奥行などが伝わってくる

初代の女将が婚礼衣装として集めた打掛がたくさんあります、いま各部屋に飾らせていただいております。今の方は、皆さんお背が高くていらっしゃいますので、多少この柄が短いかもしれません。特に外国の方には、打掛けをお召しになりたいという事でいらっしゃるときは、大体お着せして、楽しんで頂いております。

今、消防署のある一帯は、昔は池でございまして、私の小さい頃には、葦がいっぱい生えて、ほとんど沼地のようなところでした。海で、池で、昔は見晴らしが良かったです。

北側の廊下はお客様が通る廊下でございまして、一見ここが1階で、下が地下のように見えるのですが、実際には下が1階で、大広間のあるここが2階という作りになっております。

1階の部屋と太宰  
おさむ 治について 1階  
は5つ部屋がありまし  
て、たぶんこの2階の  
土台を支えるために、  
あまり大きな部屋はこれ  
ずに、細かいお部屋に  
なったのだと思います。

太宰治さんがいらした  
「桔梗」の間というお

部屋があります。この  
階段を下りて頂きます。

廊下もお一人が通るの  
でやっとという狭い廊下

なのですが、たぶんこの幅しか取れなかつたのではないかと思います。廊下の突き当りの一番奥のお部屋が「桔梗」の間というお部屋で、太宰治さんが若い時に20日間ご滞留したと言われているお部屋です。私の祖母がご接待した時代の話なのですが、大変恥ずかしい話なのですが、そんな偉い方とは存じあはずに、お代が頂けないという事で、20日でお帰り下さいという失礼なことをしました。当時、万年筆と辞書とかもお預かりしていましたが、昭和51年（1976）に旧本館から火災を出しまして全部消失をしてしまいました。とても残念なことです。

お泊りの太宰ファンの方は、「桔梗」の間に泊まりたいとお越しになります。とても狭いお部屋で、3畳と4畳半の2間なので、他の広いお部屋をお勧めしても、やはり太宰治さんがいらしたという事で「桔梗」の間に泊まりたいということで、結構お泊り頂くことがございました。

太宰治さんが船橋にお住まいだった時、ご実家の斜陽館とこの建物が似ているということで、懐かしくていらっしゃるという話を頂いたようです。広間の建物は、ご実家の斜陽館とちょうど同じころに建ったのだと思います。

昔は、ここを開けると前が海でございまして潮風が入ってとても静かで良い場所だったと思います。夜はとても静かで物思いにふけるのはよろしい場所だったのでだと思います。

今は池があるだけで、昔とはちょっと様変わりをしております。扉は昔のままです。前が海で、ここが池です。今も池は残っておりますけど、昔よりずっと小さくなっています。この建物の下に松杭まつばがはいっているそうで、池からの水がこの下にいかないといけないという事で、池はそのまま残しております。

1階には同じような2名様位の小さなお部屋が全体で5室あります。

この1階にはもうひとつ、昔ビリヤード室だったお部屋で、唯一洋室です。昔はここにビリヤードがございましたが、今はいろんな会議とか、別の目的で使って頂いております。カラオケのお部屋とか、二回次の会場にもなります。ここだけ趣きのちがうお部屋です。

天井は一回塗り替えてはいると思いますが、建築当時とそんなに変わってはおりません。そのままで。

作りが珍しいお部屋で、私はこのお部屋が好きなお部屋です。私はここで生まれたので、古いものが元は嫌いでしたから、唯一洋間だというので一番気に入っています。



文豪太宰治も通ったとされる廊下は、人間一人がやっと通れるほどの幅である



たくさんの来客に食事をもてなす際に使われていた食器類

の低学年かもっと小さい頃、船橋に芸者さんがいて、さかんな頃だったと思います。昔はこのあたりにたくさん、旅館があったのだと思います。船橋の芸者さんは、50人位いたと聞いております。

女将は、祖母から母、私で3代目です。私の父はこの玉川で生まれて、次男でございましたから、日大の歯科、歯医者になる予定で勉強していたようですが、兄が急死したのでここを継ぐようになってしましました。やはり自分の好きなことが出来なかつたのが残念だったと思います。

私はずっとここで育ちましたから、旅館の仕事を見ていましたのですが、あまりに忙しい商売で、親が全然子供を構えないという感じでしたので、ここがあまり好きではなくて、最初は父と喧嘩して、この古い建物を壊したほうがいいというお粗末な事を言ったこともあります。でもそのあと、この仕事をするようになりますて、だんだん木造の建物がいいものだと分かったのですが、一時期はだいぶ反発をしておりました。50代を過ぎてから、だんだん、木の温もりとか色々な面で、先人の知恵は素晴らしいものだなと思うようになりました。通気性がとてもいいですが、冬はとても寒いのが大変な事なのですが、風通しがいいというのが体に良いのではないかなって思います。お掃除していても、やはり木というのは柔らかくて冷たくないで、なんとなく触れていることに楽しみがありました。

ここから前は海が見えて、潮風が入って船遊びができるようです。私が中学生になる頃には、どんどん周りの建物が新しくなってきて、ここだけが一つの異空間のような感じになりました。

結構、お客様は古い建物が好きな方がいらして、近くのお祭りの行事とか催しもの時に折に触れてご利用頂いたことは、本当にありがたい事です。宴会でお客様が笑顔で楽しんでいられる姿を見ると、どちらかというと楽しい仕事だと今までずっと思っていました。

皆さん、宴会が始まると、歌や踊りとか、色々と芸をなさるのを見ていて、一緒に楽しめるといいますか。昔の人たちの宴会ってなんか本当に和やかな姿ですが、昔の日本人がお祭り好きの一番大事なパワーというか、そういうのがあるんだなと思って一緒に元気になるれる気がしまして、とても楽しめました。

**旅館の思い出** 昔、私が小さい頃は、芸者さんたちがいっぱい出入りをしておりまして、黒羽織を着た旦那衆というのでしょうか。そういう人たちの社交場だったように思います。小さい時は芸者さんが来るのがとても楽しみで、とても綺麗だし良いにおいがするので、帳場に出でくると、父に「子供が出てきてはいけない」とよく怒られたのが一番懐かしい思い出です。今でいう、小学校

ここに来ると自分の実家に帰ったような感じがするとか、木が好きなお客様に多く来て頂いたように思います。若い学生たちが遠くからの遠征で、よくいらしたのですが、若い子たちには馴染みがない所なのですが、とても楽しんで頂けたことが、今もとても嬉しく思います。小さい方からお年寄りまで、本当に多目的というか、色々な面でお使い頂いていました。お祭りなどの打ち上げとか、日頃のお祝い事、七五三、お宮参りなど、色々な時にお使い頂きました。

周りの方に良くして頂いて、わたしもその方たちに育てられたと思っております。本当に感謝しておりますし、地域の周りの方に可愛がって頂けて、この玉川もとても良かったと思います。

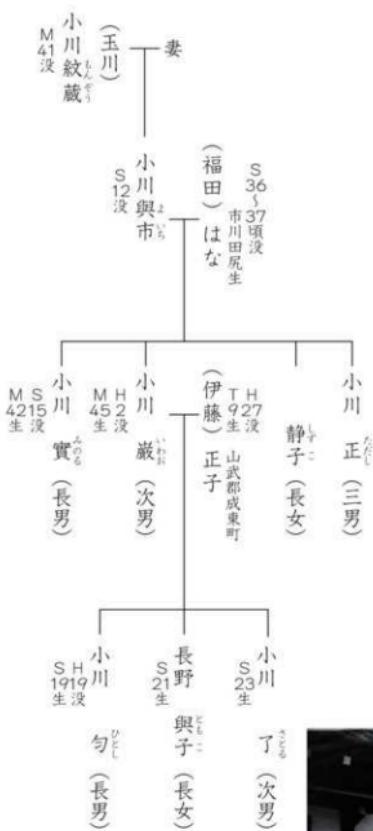
本当は残したかったのですが、修理などにたいへん、お金がかかりますし、それで今回、残念ながら閉店することになりました。皆様に感謝しております、お札を申し上げたいと思います。本当に有難うございました。

(令和2年5月18日に、館内を案内していただきながら行った、小川社長と長野女将へのインタビューをもとに、再構成して読みやすく整えました)



高層ビルの建築など大正から昭和、平成、そして令和にかけて、周辺の様子が変化していながらも、約1世紀もの長い間、旅館として船橋にどっしりと構えていた

# 玉川旅館 小川家 家系図



昭和 12(1937)年 袤さんの出征時の写真 第二別館前

# 年表～玉川旅館の記憶～

西暦	元号	社会の出来事	小川家の出来事	玉川旅館の出来事	写真ほか資料
1880	明治13			紋蔵、三田浜塩田小作となる	
1885	18	興市生?			
1905	38			紋蔵、三田浜塩田2代目経営	
1908	41	紋蔵没			
1909	42	太宰治生まれる	實生まれる	小川興市7/15登記 新聞地塩田2段歩 木造瓦葺平屋建坪52.36坪 木造瓦葺平屋物置10坪 木造瓦葺平屋物置10坪	
1912	45 大正1		巖生まれる		
1917	6	台風に伴う高潮で 船橋周辺の塩田に 甚大な被害			
1918	7			三田浜塩田経営三代目平田章千代	
1921	10			料亭「玉川」開業	この頃の絵葉書
1926	15 昭和1				
1927	2	三田浜塩園開業			松井天山「千葉県船橋町 鳥瞰図」(P6・P50)
1928	3			3/1第一別館上棟	
1929	4	第二次塩業整備 船橋周辺の塩田は 廃止			
1933	8			5/23第二別館上棟 設計:田久保政吉 請負:白井保四郎 他	この頃の絵葉書 (P7・P41・P51・P57)
1935	10	川端康成 三田浜塩園滞在 太宰治 7月～船橋居住			この頃太宰治滞在と伝わる
1936	11	太宰治 ～秋 船橋居住 「晩年」上梓			
1937	12	支那事変	興市没 52歳 巖 応召	8/12実家督相続	巖出征時写真(P61)
1940	15		巖 正子婚姻 實没 31歳		
1941	16	太平洋戦争開戦	巖 2度目の応召	巖家督相続 本館建築	
1943	18			この頃、旧本館玄関改修か	
1944	19		勅生まれる		
1945	20	敗戦			
1946	21		興子生まれる		
1947	22				US航空写真

西暦	元号	社会の出来事	小川家の出来事	玉川旅館の出来事	写真ほか資料
1948	23	太宰治没	丁生まれる	第1別館 浴室RC造建築	
1949	24			「旅館業」許可取得	
1952	27			「株式会社玉川」に組織替え 11/18受付登記 木造瓦葺平家建て居宅建坪73.75坪 附属建物瓦葺2階建て 店舗建坪19.5坪 外2階14.75坪 木造瓦葺平家店舗55.12坪 木造瓦葺2階建て店舗56.75坪 外2階89.5坪 木造瓦葺平家店舗 建坪13.75坪	
1958	33				国道14号線からの写真(P8)
1959	34				この頃の玉川周辺の航空写真
1964	39				旧市役所から玉川旅館方向の写真(P8)
1966	41			この頃、調理場2度目改修か	
1972	47				この頃の消防署付近から鳥瞰写真(P52)
1973	48				
1976	51			10/11旧本館全焼	「日本館」の火災現場写真(P8)
1977	52			木造2階建て新築(帳場)	
1989	64 平成1				
1990	2		巣 没 77歳		(株)住研企画ビデオ「心に残る故郷のすまい」に映像あり
2001	13			玉川旅館 80周年祝い	
2006	18	三田浜楽園閉館			
2007	19		匀 没		
2008	20			国登録有形文化財となる	
2019	31 令和1				
2020	2			4/30 閉館	

## 調査協力（敬称略・順不同）

株式会社玉川、有限会社大滝事務所、株式会社カツヨ、株式会社NTT東日本—南関東、  
千葉県教育庁文化財課  
小川 了、長野 與子、星野 保則、藤井 英二郎、垣中 健志

## 執筆

### 第一章 玉川旅館の沿革

記録保存の経緯 白井 太郎  
玉川旅館の歴史～約1世紀の軌跡～ 管野 泰久  
船橋海岸の風景 小田 真裕

### 第二章 玉川旅館の建築

はじめに 金出 ミチル  
本館 大橋 智子  
第一別館 大橋 智子  
癒しの時間の“おもてなし”～玉川旅館の温泉～ 林 康介  
第二別館 金出 ミチル  
桔梗の間 金出 ミチル  
太宰治と船橋・玉川～文豪の残した足跡巡り～ 管野 泰久  
「玉川旅館」創業時の建物～旧本館～ 大橋 智子  
第二別館の盛土と松杭 白井 太郎

### 第三章 玉川の日常

玉川旅館の“いま”と“むかし” 白井 太郎 編集  
玉川旅館 小川家 家系図 大橋 智子  
年表～玉川旅館の記憶～ 大橋 智子

## 編集

船橋市教育委員会文化課（白井 太郎、小中 美幸、管野 泰久、林 康介）

## 撮影

小野吉彦（表紙、本文中◎）、手塚博輔（本文中※）、株式会社萌翔社、  
船橋市教育委員会文化課

## 図面作成

大橋智子 平面図（P15, P18, P23, P50, P51, P52）  
金出ミチル 平面図（P34, P35）  
渡邊義孝 断面図（P25, P45）

# 玉川旅館 —歴史と記憶—

発行日 令和4年6月30日

発行者 船橋市教育委員会

千葉県船橋市濱町2-10-25

印刷所 有限会社エーワンネットワーク



船橋市教育委員会